■英語・英米文学文献案内（『藝文研究　文献案内』（2008 年版）より）■

英 米 文 学 専 攻
英米文学研究室編

文献は、原則として、著者（編者）名、題名、版表示、出版地（和書については省略）、出版社、出版年の順に記してある。ただし Cambridge University Press (=CUP), Oxford University Press (=OUP), University Press (=UP)と略記する。

論文作成法

アンドルー・アーマー、河内恵子、松田隆美、ウィリアム・スネル『アカデミック・ライティング応用編 ― 文学・文化研究の英語論文作成法』（慶應義塾大学出版会、1999）主にイギリス文学に関連する卒業論文作成を念頭において書かれた、内容、文体、書式などに関する演習用ガイドブック。

James D. Lester, Writing Research Papers: A Complete Guide, 8th edn (New York: HarperCollins, 1996)　英語論文の書式のみならず、資料収集の方法、テーマの見つけ方、ノートの取り方などについても具体的に記している。ネットワーク上での検索方法、インターネット上の情報の引用の仕方などについても詳しい。

ウンベルト・エーコ『論文作法 ― 調査・研究・執筆の技術と手順』谷口勇訳（而立書房, 1991）　論文のためのリサーチの方法を手ほどきしつつ、注をつけるべき場合、どういう場合に論文盗用になりうるかなど、具体的に説明している。

Robert F. Cohen and Judy L. Miller, Reason to Write: Strategies for Success in Academic Writing (Oxford: OUP, 2003)

William Strunk Jr. and E. B. White, The Elements of Style, 4th edn (Boston, MA: Allyn & Bacon, 2000)

沢田昭夫『論文のレトリック ― わかりやすいまとめ方』（講談社、1983）

辞書

〈一般辞書〉

(1) J. A. H. Murray, H. Bradley, W. A. Craigie & C. T. Onions (eds.) : The Oxford English Dictionary on Historical Principles. 13 vols. 1933. 19892. R. W. Burchfield (ed.) A Supplement to OED. Vol. I (A-G) 1972, vol. II (H-N) 1976, vol. III (O-Scz) 1982, vol. IV (Se-Z) 1986. CD-ROM 1992. 20002. Oxford U.P.　歴史的原理による最大の辞書。現在はオンラインでも検索できるようになった。

(2) C. T. Onions, et al. (eds.) : The Shorter Oxford English Dictionary. 2 vols. 1933. Revised and enlarged by L. Brown. The New Shorter Oxford Dictionary. 1993. CD-ROM 1997. Oxford U. P.　上掲(1)の簡縮版。

(3) H. W. Fowler & F. G. Fowler (eds.) : The Concise Oxford Dictionary of Current English. 1911. Revised by J. B. Sykes. 200110. CD-ROM 2000. Oxford U.P.　COD の名で親しまれつづけてきた小型辞書の代表格。米語法も充実してきた。

(4) F. G. Fowler & H. W. Fowler (eds.) : The Pocket Oxford Dictionary of Current English. 1924. Revised by D. Thompson. 20019. New Pocket Oxford English Dictionary. Oxford U.P.

(5) H. C. Wyld (ed.) : The Universal Dictionary of the English Language. 1932. Revised and enlarged by P. Partridge. 1952. Routledge and Kegan Paul.　詳しい語源と口語の平易な例文で著名。現在入手できるのはトッパンによるリプリント版。

(6) A. M. Macdonald (ed.) : Chambers Twentieth Century Dictionary. 1901. M. Robinson & G. Davidson (eds.) : 21st Century Dictionary. 1996. Chambers.　Four-letter words も多く含んだ中型辞典。

(7) A. S. Hornby (ed.) : Oxford Advanced Learnersュ Dictionary of Current English. 1948. 20006. CD-ROM あり. Oxford U.P.［『現代英英辞典』1975. 19955. 開拓社］　英語を外国語として学ぶ者のための辞書。それだけに語法的解説や例文が詳しい。

(8) D. Summers (ed.) : Longman Dictionary of Contemporary English. 1978. 20034. CD-ROM 1995. Longman.［『ロングマン現代英英辞典』19953. CD-ROM 2000. 桐原書店］　上掲(7)と同様、英語を外国語として学ぶ者のための辞書。語法的解説や例文に特徴がある。上掲(7)と共に現代英語の研究には必備。

(9) Michael Rundell (ed.) : Macmillan English Dictionary for Advanced Learners 2007. CD-ROM あり. Macmillan.

(10) J. Sinclair et al. (eds.) : Collins Cobuild English Dictionary. 1987. 20065. Collins.［『コリンズコウビルド英語辞典』1987. CD-ROM あり. 秀文インターナショナル］

(11) P. B. Gove (ed.) : Websterュs Third New International Dictionary of the English Language. 1961. 2000 with CD-ROM. A Supplement. 1976. G. & C. Merriam.　アメリカの英語辞典中最大のもので、1775 年までに廃用になった語は除かれている. 記述的性格が極めて強く、その点次の(12)の第二版と対照をなす。

(12) W. A. Neilson (ed.) : Websterュs New International Dictionary of the English Language,

Second Edition, Unabridged. 1934. G. & C. Merriam.　百科事典的性格も強く、そのため(10)の出版後も利用価値を失っていない。ただし、現在では入手は困難。

(13) W. D. Whitney (ed.) : The Century Dictionary: An Encyclopedic Lexicon of the English Language. 6 vols. 1989-91. New Edition by B. E. Smith. 12 vols. 1911. Century.　OED が出版されるまでは、英語辞書として最大のものであった。特に百科事典的記述に人気があるが、古い版なので新語等はもちろん無い。現在入手できるのは名著普及会によるリプリント版。

(14) J. Stein (ed.) : The Random House Dictionary of the English Language. 1966. Revised by S. B. Flexner. 19872. Updated by S. Steinmetz. 1997. Random House.　上掲(11)が記述主義をとるのに対して、規範的立場から書かれている。語彙数, 用例数共に(11)より劣る。

(15) S. Thorndike-Barnhart (eds.) : Scott, Foresman Advanced Dictionary. 1979. Scott, Foresman.　上掲(7)(8)のアメリカ版で例文も多く使いやすい辞書。

(16) W. Morris (ed.) : The American Heritage Dictionary of the English Language. 1969. 20004 with CD-ROM. Houghton Mifflin.　豊富な図解と用法解説で異色の辞書。

(17) H. B. Woolf (ed.) : Webster ュs New Collegiate Dictionary. 1898. 199410. CD-ROM 1996. G. & C. Merriam.　上掲(11)を土台にしたカレッジ版の代表的辞書。

(18) D. B. Guralnik (ed.) : Webster ュs New World Dictionary of the American Language: College Edition. 1953. College Second Edition. 19702. World.

(19) C. Barnhart & R. Barnhart (eds.) : The World Book Dictionary. 2 vols. 1963. 1996. World.　いわゆる Thorndike 系の最高峰に位置する辞書で、説明が明快。(12) (14)にない特色を持っている。

(20) Paul Procter (ed.) : Cambridge International Dictionary of English. 1995. Updated 2000. CD-ROM 1995. 2000. Cambridge U. P.［『ケンブリッジ・インターナショナル英英辞典』1995. Cambridge U.P.］

(21) 小稲義男他編『研究社新英和大辞典』1927. 19805. 研究社.　代表的英和辞典。第５版では大幅に語彙が増加し、発音綴字共に米国式が優先されるようになった。

(22) 小学館ランダムハウス英和辞典編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』1973-4. 19932. 小学館.　上掲(14)の初版に基づいて、日本人向けに編集しなおしたもの。

(23) 中島文雄編『岩波英和辞典』1970. 補訂版 1987. 岩波書店.　百科事典的性格を排して、ことばの辞書に徹した特徴ある辞書。

(24) 松田徳一監修『リーダーズ英和辞典』1984. 19992. CD-ROM 1993. 『リーダーズプラス』1994. CD-ROM 20002. 研究社.

〈特殊辞典〉

Ａ．発音辞典

(25) D. Jones (ed.) : Everyman ュs English Pronouncing Dictionary. 1917. Revised by A. C. Gimson. 197714. Dent.

(26) J. S. Kenyon & T. A. Knott (eds.) : A Pronouncing Dictionary of the American English. 1943. 19532. G. & C. Merriam.

(27) 大塚高信他編『固有名詞英語発音辞典』1969. 三省堂.

Ｂ．シノニム辞典

(28) G. Crabb (ed.) : English Synonyms. 1814. Revised ed. 1979. Routledge & Kegan Paul.

(29) P. B. Gobe (ed.) : Webster ュs New Dictionary of Synonyms. 19682. 1984. G. & C. Merriam.

(30) P. M. Roget (ed.) : Roget ュs International Thesaurus. 1952. Revised by R. L. Chapman. 19925. Crowell.　類書が多くある。英文を書こうとするときシソーラスは必備。

Ｃ．語法, イディオム, 連語

(31) R. W. Burchfield (ed.) : The New Fowler ュs Modern English Usage. 1926. 19983. Oxford U. P.

(32) E. Patridge (ed.) : Usage and Abusage. 1942. 19656. New edition by J. Whitcut. 1995, 1999. Penguin.

(33) 石橋幸太郎編『英語語法大辞典』1966. 渡辺登士他編. 続編 1977. 第３集 1981. 大修館書店.　語法ばかりではなく、文法的な問題も扱う。日本人向けの辞典。縮約版あり。

(34) 勝俣詮吉朗編『新英和活用大辞典』1939. 市川繁治郎編. 『新編英和活用大辞典』1995. CD-ROM 1996. 研究社.　語と語との結びつき（連語）を多くの用例で示す。英文を書くときに便利。

(35) 大塚高信他編『新クラウン英語熟語辞典』1965. 19863. 三省堂書店.　５万以上の熟語を収録。文学書などを読むときには重宝な辞書。

Ｄ．語源辞典

(36) E. Klein (ed.) : A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language. 2 vols. 1971. 20007. Elsevier.　最も学問的で詳しい語源辞典。

(37) W. W. Skeat : An Etymological Dictionary of the English Language. 初めは 2 vols. 1879-1882. 19744. Oxford U.P.　縮約版もあり。

(38) 中島文雄・寺澤芳雄編『英語語源小事典』1962. 研究社.　語数は少ないが、学

問的にも信頼のおける小事典。
(39) 寺澤芳雄他編『英語語源辞典』1997. 縮約版 2001. 研究社.
（John Scahill 編）

英語学

㈱. 英語学・言語学辞典
(1) 市川三喜編『英語学辞典』1940. 195614. 研究社. 内容は古くなった部分もあるが、伝統文法的な記述は今なお有用。
(2) 大塚孝信・中島文雄監修『新英語学辞典』1982. 研究社. 上掲(1)の新版で、新言語学の成果が取り入れられている。
(3) 松波有・池上嘉彦・今井邦彦編『大修館英語学辞典』1983. 大修館書店. 用語辞典であると共に、それぞれの項目が読み物となっている。
(4) 石橋幸太郎編『現代英語学辞典』1973. 19753. 成美堂. 付録の文献解題が役に立つ。
(5) 安井稔編『新言語学辞典』1971. 改訂増補 1975. 研究社. いわゆる変形文法を中心に扱ったもので、小項目主義である。
(6) 国語学会編『国語学大辞典』1980. 199910. 東京堂. 英語学辞典ではないが、一般言語学・英語学にも大いに役立つ。
(7) 荒木一雄・安井稔編『現代英語学辞典』1992. 三省堂. (2)以後の発展を理解するのに役立つ。
(8) 安井稔編『コンサイス英文法辞典』1996. 三省堂.
(9) 安藤貞雄・樋口昌幸『言語学・英語学小事典』1990. 北星堂.
(10) ―『英文法小事典』1991. 北星堂. (9) (10)共便利な小事典。
(11) 荒木一雄編『英語学用語辞典』1999. 三省堂.
(12) 今井邦彦『チョムスキー小事典』1986. 大修館書店. 生成文法の包括的な解説書。
(13) 原口庄輔・中村捷編『チョムスキー理論辞典』1992. 研究社.
(14) 安藤貞雄・小野隆啓『生成文法用語辞典』1993. 大修館書店. 生成文法の主要概念・用語をわかりやすく解説している。(13)には、ミニマリスト・プログラムについても詳しい解説がある。
(15) 辻幸夫編『ことばの認知科学辞典』2001. 大修館書店. 言語と認知に関する各分野の概観と展望がまとめられている。各分野における第一人者により各章が書かれており、言語と認知を研究する者には必携書。

(16) R. Quirk, S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik : A Comprehensive Grammar of the English Language. 1985. Longman.

㈱. 概説書（一般言語学の枠組みによる）
(17) E. Sapir : Language: An Introduction to the Study of Speech. 1921. Harcourt, Brace & Co.［木坂訳『言語 ― ことばの研究序説』1943. 刀江書院. 泉井訳『言語 ― ことばの研究』1957. 紀伊国屋書店. 安藤訳『言語 ― ことばの研究序説』1998. 岩波書店］
(18) L. Bloomfield : Language. 1933. Holt.［勇訳述『構造言語学言論』(chs.1-16 の要約・解説). 1959. 研究社. 増山訳述『比較言語学・歴史言語学言論』(chs.17−28 の要約・解説). 1959. 研究社. 三宅・日野訳『言語』1962. 新装版 1970. 大修館書店］
(19) J. Lyons : An Introduction to Theoretical Linguistics. 1968. Cambridge U. P.［国広他訳『理論言語学』1973. 大修館書店］ かなり高度な入門書。
(20) C. Hockett : A Course in Modern Linguistics. 1958. Macmillan.
(21) A. Akmaijian, et al. : Linguistics: An Introduction to Language and Communication. 1979. 20015. MIT Press.［藤森監訳・斎藤他訳『新言語学概説：言語と伝達の仕組み』1982. 環翠堂］ 変形文法の立場から書かれた入門書。

㈮. 英語史
〈一般〉
(22) F. Moss□ : Esquisse dュ une histoire de la langue anglaise. 1947. Lyon.［郡司・岡田訳『英語史概説』1976. 開文社］ 内面史・外面史共、著者の英語学者としての鋭い眼力が随所に窺われる。最も優れた英語史の一つ。
(23) R. M. Hogg (ed.): The Cambridge History of the English Language. 6 vols. 1992-2001.
(24) A. L. Wrenn : The English Language. 1949. Methuen.［新村訳『英語学概論』1980.桐原書店. 大澤訳『英語学概論』1980. 朝日出版社］英語学の正しい研究方法・目的を示し、語学と文学の乖離を戒め、歴史的な展望に多くの項をさいている。重厚な好著。
(25) A. C. Baugh : A History of the English Language. 1952. 19934. Routledge & Kegan Paul.［永嶋他訳『英語史』1981. 研究社］ 内面史・外面史共、時代を追って網羅的に記述したもの。Bibliography が便利。
(26) R. Lass: The Shape of English: Structure and History. 1987.
(27) D. Denison: English Historical Syntax. 1993.
(28) K. Brunner : Die englishe Sprache: Ihre geschichtliche Entwicklung. 1962. Mac Niemeyer Verlag.［松波・小野・忍足・秦共訳『英語発達史』1973. 大修館書店］ 専ら英語の内面史を極めて詳細に体系的に記述した大著。今世紀最大最良の書。
(29) 下宮忠雄編『英語学文献解題第 1 巻：言語学㈱』1998. 研究社.

(30) 大泉昭夫編『英語学文献解題第３巻：英語史・歴史英語学』1997. 研究社.
(31) 大泉昭夫編『英語史・歴史英語学：文献解題書誌と文献目録書誌』1997. 研究社.
(29) (30) (31)共に各分野の重要文献の解題と文献目録が網羅的に記載されている非常に有益なもの。(29)は言語学史的な観点から一般言語学、歴史比較言語学、言語地理学や類型論などの分野を、(30)は英語史、歴史英語学の分野を、(31)は英語史、歴史英語学の各分野を扱っている。

〈時代別　OE に関するもの〉
(32) H. Sweet : An Anglo-Saxon Primer. 1882. Revised by N. Davis. 19539. Oxford U. P.［東浦訳註『古代英語文法入門』1975. 千城書店］Early MS を基盤とした文法書。テキスト付で入門書として最良のもの。
(33) 小野茂・中尾俊夫『英語学大系８巻：英語史㈱』1972. 大修館書店.　古英語に関する各分野を概観している。

〈時代別　ME に関するもの〉
(34) F. Moss□ : Mannuel de l ュanglais du moyen 曳e des origins au XIVe si 縦le ㈱: Moyen-anglais. 2 tomes. 1949. Aubier.［英訳. J. A. Walker : A Handbook of Middle English. 1952. The Johns Hopkins Press］　第１巻が文法とテキスト､第２巻が註とグロサリー。充実した内容で中・上級者向き。
(35) 中尾俊夫『英語学大系第９巻：英語史㈱』1972. 大修館書店.　中英語（Middle English）の各分野を概観している。

〈時代別　現代英語に関するもの〉
(36) S. Potter : Changing English. 1969. 19752. Andr□ Deutch.
(37) B. Foster : The Changing English Language. 1968. Macmillan.［吉田訳『変容する英語』1973. 研究社］
(38) C. Barber : Linguistic Change in Presentday English. 1964. Oliver & Boyd.［八田訳『現代英語の変化』1972. 篠崎書林］　この３点はいずれも現代英語の動向を取り扱ったものである. Potter は、音韻・綴字・語彙・文法の各項目にわたって万遍なく記述している。Foster のものは、アメリカ英語および外国語の影響についての記述に特色がある。Barber のものは発音に詳しい。
(39) A. A. Krapp : The English Language in America. 2 vols. 1925. Century.　第１巻は入植の歴史・語彙・方言・スタイル・綴字などを扱い、第２巻は主として音韻論を扱っている。学問的であると同時に、面白く読ませている。

〈発音に関するもの〉
(40) A. A. Prins : A History of English Phonemes. 1972. 19742. Leiden U. P.　IE から ModE に至る音韻の変遷史。諸家を踏まえて要領よくまとめられている。

〈近代英語に関するもの〉
(41) 荒木一雄・宇賀字正朋『英語学大系 10 巻：英語史㈹A』1972. 大修館書店.　近代英語に関する各分野を網羅的に扱っている。

〈米語史に関するもの〉
(42) 若田部博哉『英語学大系 10 巻：英語史㈹B』1972. 大修館書店.　米語史を扱っている。

㈱. 音声学・音韻論
(43) 島岡丘他編『英語学文献解題第６巻：音声学・音韻論』1999. 研究社.　音声学・音韻論に関する重要文献の解題と文献目録が網羅的に記載されている。非常に有益なもの。
(44) 服部四郎『音声学』1951. Reprinted 1984. 岩波書店.　一般音声学の詳しい入門書。
(45) A. C. Gimson : An Introduction to the Pronunciation of English. 1962. Rev. by A. Cruttenden. 19945 . Edward Arnold.［竹林訳『英語音声学入門』1983. 金星堂］
(46) J. S. Kenyon : American Pronunciation. 1924. Edited and expanded by D. M. Lance & S. A. Kingsbury. 199712. George Wahr.［竹林訳『アメリカ英語の発音』1973.大修館書店］
(47) N. S. Trubetzkoy : Grundz 殀e der Phonologie. TCLP, vol.7. 1939. 19897. Cercle Linguistique de Prague.［英訳 Baltaxe : Principles of Phonology. 1969. U. of Berkeley P. 長嶋訳『音韻論の原理』1980. 岩波書店］　現代の音韻論に計り知れない影響を与えた名著。
(48) 小泉保・牧野勤『英語学体系第１巻：音韻論㈱』1971. 大修館書店.　ヨーロッパの音声学と音韻論を扱う。
(49) 筧寿雄・今井邦彦『英語学体系第２巻：音韻論㈱』1971. 大修館書店.　アメリカの構造主義の音韻論と変形文法の音韻論を扱う。
(50) R. Jakobson, C. G. M. Fant & M. Halle : Preliminaries to Speech Analysis. 1951. MIT Press.［竹林他訳『音声分析序説』英語学ライブラリー60. 1965. 研究社］
(51) N. Chomsky & M. Halle : The Sound Pattern of English. 1968. Harper & Row.　生成音韻論の代表的著作。
(52) P. Ladefoged : A Course in Phonetics. 1975. 20014. Harcourt C. P.［竹林・牧野訳『音声学概説』1999. 大修館書店］　記述音声学の価値ある書。

(53) A. S. Prince & P. Smolensky : Optimality Theory. 1993. MIT Press.　新しい理論が研究者によって注目されている。
(54) 国際音声学会編『国際音声記号ガイドブック』2003. 研究社.

㈜. 伝統文法

(55) H. Sweet : A New English Grammar: Logical and Historical. 2 vols. 1891-98. Oxford U.P.　科学的な英文法の先駆的役割を演じた古典で、部分的には今も重要。
(56) O. Jespersen : A Modern English Grammar on Historical Principles. 7 vols. 1909-49. George Allen & Unwin.　多くの用例を含む伝統英文法の最高峰。
(57) F. de. Saussure : Cours de linguistique g 始屍 ale. 1916. 19494. Payot.［英訳 W. Baskin : Course in General Linguistics. 1959. Philosophical Library. 1983. Duckworth. 小林訳『言語学原論』1928. 岡書院. 『ソシュール一般言語学講義』1972. 岩波書店］
(58) G. O. Curme : Syntax. 1931. Heath.
(59) O. Jespersen : Essentials of English Grammar. 1933. George Allen & Unwin. Reprinted 1993. Routledge.［中島訳『エッセンシャル英文法』1962. 千城書房. 中島訳『英文法エッセンシャルズ』1965. 千城書店］　上掲(56)の資料に基づいてその要約を述べたもので、伝統文法の最良の入門書の一つ。
(60) 太田朗・池谷彰・村田勇三郎『英語学体系第３巻：文法論㈱』1972. 大修館書店. 伝統文法の諸説を概観してあって便利である。

□. 文法

〈構造主義文法〉

(61) C. C. Fries : The Structure of English: An Introduction to the Construction of English Sentences. 1952. Harcourt, Brace.
(62) A. A. Hill : Introduction to Linguistic Structures: From Sound to Sentence in English. 1958. Harcourt, Brace & Javanovich.［筧訳注『言語構造序説』1966. 南雲堂］
(63) Z. S. Harris : Methods in Structural Linguistics. 1951. Later pub. under the title: Structural Linguistics. 1960. Reprinted 1986. U. of Chicago P.　上掲３書はいずれもアメリカ構造主義言語学の頂点を示すもので、精密な方法論が展開されている。
(64) N. Francis : The Structure of American English. 1958. The Ronald Press.
(65) H. A. Gleason : An Introduction to Descriptive Linguistics. 1955. 19653. Holt, Rinehart & Winston.［竹林・横山訳『記述言語学』1970. 19764. 大修館書店］　アメリカ構造主義言語学の代表的テキスト。

〈変形文法〉

(66) N. Chomsky : Syntactic Structures. 1957. Mouton.［勇訳『文法の構造』1963. 研究社］
(67) N. Chomsky : Aspects of the Theory of Syntax. 1965. MIT Press.［安井訳『文法理論の諸相』1970. 研究社］
(68) N. Chomsky : Studies on Semantics in Generative Grammar. 1972. Mouton.［安井訳『生成文法の意味論研究』1976. 研究社］
(69) N. Chomsky : Reflections on Language. 1975. Pantheon Books.［井上・神尾・西山訳『言語論』1979. 大修館書店］
(70) N. Chomsky : Lectures on Government and Binding. 1981. 19885. Foris.［安井・原口訳『統率・束縛理論』1986. 研究社］
(71) N. Chomsky : Barriers. 1986. MIT Press.［北原他訳『障壁理論』1994. 研究社］　上掲(66)～(71)は、変形文法の創始者であるチョムスキー自身の著作によって、標準理論(67)、拡大標準理論(68)、修正拡大標準理論(69)、いわゆる GB 理論(70)、そして障壁理論(71)に至るまでの理論的発展を知るためには、いずれも欠くことができないものである。
(72) N. Chomsky : The Minimalist Program. 1995. MIT Press.［外池・大石監訳『ミニマリスト・プログラム』1998. 翔泳社］
(73) 中村捷・金子義明・菊池朗『生成文法の基礎』1989. 研究社.　GB 理論の枠組みなどを詳細に解説している。
(74) 町田健『生成文法がわかる本』2000. 研究社.　生成文法をやさしく解説している.
(75) 原口庄輔他編『英語学文献解題第５巻：文法㈱』近刊. 研究社.　生成文法等の分野における主要文献の解題と文献目録が網羅的に記載されている。
(76) R. S. Jackendoff : Semantic Interpretation in Generative Grammar. 1972. MIT Press.
(77) J. E. Emonds : A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations. 1976. Academic Press.　上掲２書は、拡大標準理論の枠組みで書かれており、英文法の研究書にもなっている。
(78) A. Radford : Transformational Syntax: A Student ュ s Guide to Chomsky ュ s Extended Standard Theory. 1981. Cambridge U.P.［吉田訳『変形統語論』1984. 研究社］
(79) L. Haegeman : Introduction to Government and Binding Theory. 1991 19942. Blackwell. 上掲２書は、変形文法を初歩から始めて、かなり高度な段階まで平易な英語で記述してある入門書。
(80) 太田朗・梶田優『英語学体系第４巻：文法論㈱』1974. 大修館書店.　変形文法の概説書で、日本人の手になるものとしては最良のものの一つ。
(81) 荒木一雄他『文法論』1982. 研究社.

〈その他のもの〉

(82) R. Quirk, S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik : A Comprehensive Grammar of the English Language. 1985. Longman.　Halliday の文法理論の枠組みで書かれた折衷的であるが包括的な記述文法書。

(83) M. A. K. Halliday : A Course in Spoken English: Intonation. 1970. Oxford U. P.

(84) S. M. Lamb : Outline of Stratificational Grammar. 1966. Georgetown U. P.　いわゆる成層文法の入門書であるが、記述が簡単すぎて分かりにくいところがある。

(85) 村田勇三郎『機能英文法』1982. 19854. 大修館書店.　Halliday の文法理論を使って、機能の観点から英文法を見たもの。

(86) M. A. K. Halliday : An Introduction to Functional Grammar. 1985. 19942. Arnold.［山口・筧訳『機能文法概説』2001. くろしお出版］　Halliday の文法理論の枠組みを理解するための必読書。

(87) S. Eggins : An Introduction to Systemic Functional Linguistics. 1994. Pinter.　Halliday の文法理論の枠組みを易しく解説した好著。

(88) J. Martin, C. Matthiessen & C. Painter : Working with Functional Grammar. 1997. Arnold.　Halliday (1985)の格好の手引書。

(89) G. Thompson : Introducing Functional Grammar. 1996. Arnold.　Halliday の文法理論の枠組みに沿った機能文法の入門者向け解説書。

(90) D. Biber, et al (eds.): Longman Grammar of Spoken and Written English. 1999. Longman.　初めて書き言葉と並んで話し言葉を体系的に扱った包括的な文法書。

□. 意味論

(91) R. Huddleston & G. Pullum: The Cambridge Grammar of the English Language. 2002.

(92) S. Ulman : Semantics: An Introduction to the Science of Meaning. 1962. Basil Blackwell.［池上訳『言語と意味』1966. 大修館書店］　多くの例で実証的に説明されている最良の入門書の一つ。

(93) S. Ullmann : The Principles of Semantics: A Linguistic Approach to Meaning. 1951. 19572. Basil Blackwell.　上掲(88)よりも理論的。

(94) G. Leech : Semantics. 1974. 19812. Penguin.［安藤訳『現代意味論』1977. 研究社］現代の意味論を前理論的な段階からわかりやすく概観したもの。

(95) J. Lyons : Semantics. 2 vols. 1977. Cambridge U.P.　最も包括的で最良のものの一つ。

(96) 池上嘉彦『意味論 ― 意味構造の分析と記述』1975. 大修館書店.　言語学的意味論の本格的な概説書。意味とは何かから、テキストの意味にまで及ぶ好著。

(97) 国広哲也『意味論の方法』1982. 大修館書店.　語の意味の分析方法を主として日本語について論じたもの。意義素の概念が良く説明されている。

(98) E. Nida : Componential Analysis of Meaning. 1975. Mouton.［ブランネン監, 升川他訳『意味の構造 ― 成分分析』1977. 研究社］　成分分析の具体的な事例を数多く与えてくれる。

(99) J. Lyons : Language, Meaning & Context. 1981. Fontana.　上掲(95)以後の発展を採り入れた、小著ではあるがよくまとまったもの。

(100) G. Lakoff : Women, Fire and Dangerous Things. 1987. U. of Chicago P.［池上他訳『認知意味論』1993. 紀伊国屋書店］　認知意味論の代表的著作で非常に示唆に富む。

(101) 山中桂一他編『英語学文献解題第 7 巻：意味論』2005. 研究社.　意味論に関する重要文献の解題と文献目録が網羅的に記載されている。非常に有益なもの。

(102) J. R. Taylor : Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory. 1989. 19952. Clarendon Press.［辻幸夫訳『認知言語学のための 14 章』1996. 紀伊国屋書店］

□. 談話文法・語用論

(103) M. A. K. Halliday & R. Hasan : Cohesion in English. 1976. Longman.　英語の結束関係を扱った名著。理論的にも実践的にも極めて有用。

(104) R. de Beaugrande & W. U. Dressler : Introduction to Text Linguistics. 1981. Longman.［池上他訳『テクスト言語学入門』1984. 紀伊國屋書店］　テキスト言語学の標準的入門書。

(105) 久野『談話の文法』1978. 大修館書店.　機能主義の観点から、主として省略を中心に日英語の談話を比較した好著。

(106) 安井稔『新しい聞き手の文法』1978. 大修館書店.　聞き手の視点から英文法を見直したもの。

(107) V. Mathesius & J. Vachek (eds.) : A Functional Analysis of Present-Day English on a General Linguistic Basis. 1975. Mouton.［飯島訳『機能言語学』1981. 桐原書店］　現代英語の機能主義的分析。プラ−グ学派の動向を知る上で重要。

(108) J. L. Austin : How to Do Things with Words. 1962. 19752. Oxford U. P.［坂本訳『言語と行為』1978. 大修館書店］　いわゆる発話行為理論の原点とでもいうべき書。

(109) J. R. Searle : Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language. 1969. Reprinted 1987. Cambridge U. P.［坂本・土屋訳『言語行為 ― 言語哲学への試論』1986. 勁草書房］　基本図書の一つ。

(110) S. C. Levinson : Pragmatics. 1983. Cambridge U. P.［安井・奥田訳『英語語用論』1990. 研究社］　現在までの語用論を概観できる好著。周辺の問題も広く拾って分析してある。

(111) G. Leech : Principles of Pragmatics. 1983. Longman.［池上・河上訳『語用論』1987. 紀伊國屋書店］　人間関係の語用論を中心に整理している。

(112) 毛利可信『英語の語用論』1980. 19928. 大修館書店. よくまとまっていて、日英語の比較もある。
(113) J. Thomas : Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics. 1995. Longman.［田中他訳『語用論入門』1998. 研究社］ 語用論の基本的な知識を整理するのによい。
(114) E. Goffman : Forms of Talk. 1981. U. of Pennsylvania P. 言語、非言語行動とコンテクストの有契性を説く。
(115) K. H. Basso & H. A. Selby (eds.) : Meaning in Anthropology. 1976. U. of New Mexico P. Silverstein による Shifters の論文を含む。

□. その他（言語と文化、社会言語学、対照研究など）
(116) 唐須教光編『英語学文献解題第２巻：言語学篇』2000. 研究社. 社会言語学・言語人類学・テキスト言語学に関する重要文献の解題と文献目録が網羅的に記載されている。非常に有益なもの。
(117) 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』1981. 大修館書店. 新しい形の言語文化論であり、言語類型論でもある知的刺激にあふれた絶好の書。日英語の対照研究においても欠かすことができない必読の書。
(118) D. Hymes : Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach. 1974. U. of Pennsylvania P. Reprinted 1977. Tavistock.［唐須訳『ことばの民俗誌』1979. 紀伊国屋書店］ 社会言語学の諸問題を民族語的視点から説明した好書。
(119) P. Trudgill : Sociolinguistics: An Introduction. 1974. 19953. Penguin Books.［土田訳『言語と社会』1975. 岩波書店］
(120) M. Saville-Troike : The Ethnography of Communication: An Introduction. 1982. 19892. Basil Blackwell.
(121) 池上嘉彦編『文化人類学と言語学』1970. 弘文堂. サピア・ウォーフの仮説に関する多くの論文の訳.特に編者の解説が有益。
(122) K. H. Basso & H. A. Selby (eds.) : Meaning in Anthropology. 1976. U. of New Mexico P. 人類学における言語（特に意味）の問題を扱った論文集。
(123) J. J. Gumperz & S. C. Levinson (eds.) : Rethinking Linguistic Relativity. 1996. Cambridge U. P.
(124) A. Duranti : Linguistic Anthropology. 1997. Cambridge U. P.
(125) 池上嘉彦・山中桂一・唐須教光『文化記号論への招待』1983. 有斐閣.
(126) T. Sebeok (ed.) : Style in Language. 1960. MIT Press. 文体論を言語学の上に新たに復活させたヤコブソンの ｻLinguistics and Poeticsｻ も含む論文集。
(127) 池上嘉彦『英詩の文法 ― 語学的文体論』1967. 研究社. 英詩を言語学的に処理すればどうなるかを分かりやすく見せてくれる。

(128) G. Leech : A Linguistic Guide to English Poetry. 1969. Longman.［島岡・菅野訳『英詩鑑賞：言語学からの洞察』1994. リーベル出版.
(129) 服部四郎『音韻論と正書法』1951. 研究社. 新版 1979. 大修館書店. 日本語を題材にしたものであるが、正書法の根本的な問題に音韻論の観点から取り組んだ好書。
（唐須教光・John Scahill 編）

イギリス文学

1. イギリス文学全般、2. 中世、3. 16-17 世紀、4. 18 世紀、5. 19 世紀、6. 20 世紀以降に分けて、基本的文献を中心に紹介する。

1. イギリス文学全般
1.1. 文学史
Oxford English Literary History (Oxford: OUP, 2004-) 全 13 巻予定の新企画。「文学史」を捉えなおす試みがなされている。
Oxford History of English Literature (Oxford: Clarendon Press, 1945-) 十数巻からなる本格的なイギリス文学史。ほぼ完結している。
George Sampson, The Concise Cambridge History of English Literature, 3rd edn, rev. by R. C. Churchill (London: CUP, 1970) / ジョージ・サンプソン『ケンブリッジ版イギリス文学史』平井正穂監訳、全４冊（研究社出版、1976-78）
齋藤勇『イギリス文学史』改訂増補第５版（研究社出版、1974）
Boris Ford, ed., The Pelican Guide to English Literature, 9 vols (Harmondsworth: Penguin, 1982-84) 文学史だけでなく、歴史的背景、文化的文脈、代表作品の解説も。必読。
Pat Rogers, ed., The Oxford Illustrated History of English Literature (1987; Oxford: OUP, 2000) / パット・ロジャーズ編『図説イギリス文学史』櫻庭信之監訳、青木健他訳（大修館書店、1990） 肖像画ばかりでなく、コンテクストに沿った多様な図が使用されている。新版では更に図が拡充された。
The Cambridge History of Literary Criticism Series, 9 vols (Cambridge: CUP, 1993-) 文芸批評史のシリーズ。
The Penguin History of Literature, 10 vols (Harmondsworth: Penguin, 1994) 各時代のイギリスおよびアメリカ文学について、作家やテーマごとに分類された論考からなるシ

リーズ。必読。

Ronald Carter and John McRae, The Routledge History of Literature in English Language: Britain and Ireland (London: Routledge, 1997)　批評など副次的な知識がコラムによって補われているため初学者に向いている。

The New Cambridge History of English Literature Series (Cambridge: CUP, 1999-)　1907年から約20年をかけて刊行された、ヤCambridge History of English Literatureュにかわる新シリーズ。

Andrew Sanders, The Short Oxford History of English Literature, 2nd edn (1996; Oxford: OUP, 2000)　新しい文学史の中では珍しく、個人により執筆されており、比較的読みやすい。

1.2. 事典 / 研究案内

1.2.1. 事典

Michael Stapleton, The Cambridge Guide to English Literature (Cambridge: CUP, 1983)　写真入りで事典形式。

Margaret Drabble, ed., The Oxford Companion to English Literature, 6th edn (revised) (Oxford: OUP, 2006)　簡約版もあり。

斎藤勇編『研究社英米文学辞典』第３版（研究社、1985）　1960年代頃までの作家、作品、文学理論、批評用語をカバーしている有益な辞典。世界中の英語圏地域の文学を扱っている。

Merriam-Webster ュs Biographical Dictionary (Springfield, MA: Merriam-Webster, 1995) 国を問わず比較的最近の人物を広く収録している人名辞典。個人の手元に置ける規模のものでは、最も便利である。

Oxford Dictionary of National Biography, 61 vols (Oxford: OUP, 2004)　イギリス人については最も詳しい網羅的な伝記事典の新版。オンライン版（慶應義塾図書館ウェブサイトからアクセス可）が極めて便利。

1.2.2. 研究案内

The Blackwell Companion to Literature and Culture Series (Oxford: Blackwell)　斬新な分類に基づいていて、新分野の研究に有益。

The Cambridge Companion to Literature Series (Cambridge: CUP)　時代、ジャンル、作家毎に編集されたバランスの良い研究ガイド。

How to Study Series, gen. ed. by John Peck and Martin Coyle (Basingstoke: Macmillan)　シリーズには作家ごとに分類されたものから、詩の研究方法、批評史などについて説くものまで様々。研究の典型的な方法を知るのに便利。

Oxford Reader ュs Companion Series (Oxford: OUP)　作家ごとに編集され、辞書形式で項目ごとに引ける事典。

Martin Banham, ed., The Cambridge Guide to World Theatre (Cambridge: CUP, 1988)　演劇についてギリシアから現代まで網羅的に扱っているので便利。

Cleanth Brooks and Robert Penn Warren, eds, Understanding Poetry, 4th edn (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1976)　詩作の諸相ごとに分類、問いを付した学習用。

Clare Buck, ed., Bloomsbury Guide to Women ュs Literature: From Sappho to Atwood, Women ュs Writing through the Ages and throughout the World (London: Bloomsbury, 1992) 女性作家を非常に幅広くとりあげている。

Humphrey Carpenter and Mari Prichard, eds, The Oxford Companion of Children ュ s Literature (Oxford: OUP, 1984)

Paul Fussell, Poetic Meter & Poetic Form, rev. edn (New York: McGraw-Hill, 1979)　英詩の韻律や詩形についての簡潔な入門書。

Ruth Glancy, Thematic Guide to British Poetry (Westport, CT: Greenwood, 2002)

James L. Harner, Literary Research Guide: An Annotated Listing of Reference Sources in English Literary Studies, 3rd edn (New York: Modern Language Association of America, 1998)　英米文学における主要なレファレンス・ブックを詳細に紹介している。

Jeremy Hawthorn, Studying the Novel: An Introduction, 3rd edn (1985; New York: Arnold, 1997)　小説の様々な研究法について易しく解説した入門書。

John Hollander, Rhyme ュs Reason: A Guide to English Verse, 3rd edn (New Haven, CT: Yale UP, 2001)　sonnet から英語で書く haiku にいたるまで、詩形や技法の歴史からそれらの書き方までを簡潔に説明している。

Lona and Peter Opie, eds, The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes (Oxford: OUP, 1951)

1.3. 研究叢書

Case Studies in Contemporary Criticism Series (Boston: St. Martin ュs)　特定の作品を採り上げ、それを典型的な現代批評の方法論ではどのように解釈できるか、数編の試論によって示すシリーズ。それぞれの批評理論について簡便な解説が附されており、便利。

The Critical Heritage Series, gen. ed. by B. C. Southam (London: Routledge)

The Helm Information: Critical Assessments of Writers in English, gen. ed. by Graham Clarke (Mountfield: Helm Information)　この２つのシリーズは、特定の作家の批評を細かに収集しており、作家の批評を概観しておく上で必須。

Icon Readers ュ Guides Series, gen. ed. by Nicolas Tredell (Duxford: Icon Books)　作家、作品毎の批評の変遷が綴られていて、作品がどの様に論じられてきたのかを知る上で重要。また、批評史で学んだ理論が、どの様に実践されているのかという具体例を知る

上でもとても勉強になる。
Longman Critical Readers Series, gen. ed. by Stan Smith (London: Longman)　作家、文学ジャンル毎の批評のアンソロジー。各分野での一流の研究を知っておく上で有益である。
Modern Critical Interpretations, ed. by Harold Bloom (Chelsea House)　英米の主要作品ごとの評論集。
New Case Books: Contemporary Critical Essays (Basingstoke: Macmillan; New York: St Martin ュs)　特定の文学作品に対する過去の代表的な批評のアンソロジー。
Teach Yourself Literature Guides (London: Hodder & Stoughton)　模擬的な講義・議論の形態で編集され、疑問を提起し、研究の可能性を示唆するべく工夫されている。
Writers and their Work Series (Estover: Northcote in association with the British Council) 作家別の簡潔な研究案内。新しい作家についても積極的に取り上げている。伝記に織り込みながら作品を紹介。
「研究社 小事典シリーズ」(研究社出版)　主に作家ごとに編集された英米文学研究のシリーズ。あらゆるアプローチから作家を紹介している点で興味深く、また新しい文献表も含んでいる。

1.4. 定期刊行物
以下のものは、毎年膨大な量の書評が掲載されるため研究案内としても貴重。
The Review of English Studies: (Oxford: OUP, 1949-)
The Year Book of English Studies (London: Modern Humanities Research Association, 1971-)
The Times Literary Supplement (London: The Times, 1902-)　TLS.　週刊の新刊紹介、書評誌。
『英語青年』(研究社)　明治 31 年から刊行されている月刊の英語･英米文学研究誌。特集、書評、新刊案内、イベントガイドなど。
『英語年鑑』(研究社)　国内の英語・英米文学研究に関する情報（研究者、大学英文科一覧)、当該年の研究動向などを収録した年鑑。

1.5. 作品のアンソロジー
The Best Poems of the English Language: From Chaucer through Frost, selected and with commentary by Harold Bloom (New York: HarperCollins, 2004)
Blackwell ュs Annotated Anthologies, 4 vols+ (Oxford: Blackwell, 1999-)　1999 年から始まった、各出版社の中でも最も新しいシリーズ。現在のところ英詩を中心に 17 世紀からヴィクトリア朝までが出版されている。タイトル通り、その詳細な註釈に重点が置

かれている。
Blackwell Anthologies, 15 vols+ (Oxford: Blackwell, 1994-)　1994 年から開始された比較的新しいシリーズ。既に英米文学の各時代、マイナージャンルが網羅されており、また各巻の収録数も豊富で近年注目される様になった作家の作品を積極的に取り上げている。
Literature Online　英米文学の統合的フルテクストデータベース。英米文学の全ての時代に関して、刊行された詩、戯曲のほとんど全てと、主要な小説の大半に関して、全文を横断検索出来る。リサーチにはとても便利なツールだが、コピーライトの問題を回避するために、比較的古い版が使用されているので、引用に際しては最新のエディションで確認することが望ましい。慶應義塾図書館ウェブサイトよりアクセス可能。
Longman Anthology of British Literature, gen. ed. by David Damrosch, 6 vols (London: Longman, 1998-2000)
The Norton Anthology of English Literature, gen. ed. by Stephen Greenblatt, 8th edn (1962; New York: Norton, 2006)　大変歴史の長い選集であるが、編者を変えて新たな研究視点を反映させた版として再出版され、版を重ねている。
The Oxford Anthology of English Literature, gen. ed. by Frank Kermode and John Hollander, 6 vols (Oxford: OUP, 1973)　2002 年に始まった第２版刊行だが、現在は中世英文学の巻のみが上梓されている。
John Gross, The Oxford Book of English Prose (Oxford: OUP, 1988)　特にイギリスの散文文学という視点から編集されており、一冊で概観できるという点で貴重。

1.6. 書誌
Annual Bibliography of English Language and Literature (1920-)　ABELL.　イギリスで編纂されている英米文学、英語学関係の年次書誌。On-line 版もある。
Modern Language Association International Bibliography of Books and Articles on the Modern Language and Literature (1922-)　MLA.　アメリカで編纂されている網羅的な年次書誌。CD-ROM 版、On-line 版あり。
The Year ュs Work in English Studies (Oxford: Blackwell, 1921-)　英文学、米文学、英語圏文学、英語学を対象として、当該年に刊行された良質の研究書、論文のみを書評形式で紹介している必須文献。
David McKitterick, gen. ed., Cambridge Bibliography of English Literature, 3rd edn (Cambridge: CUP, 1999-)　冊子体の書誌。初版は 1940-57 年、第２版 (New CBEL) は 1969-77 年に刊行されたが、現在刊行中のものはその第３版。

1.7. 文学の文脈（文化史、宗教史、美術史、社会史関連の基本書）

1.7.1. 通史

Boris Ford, ed., The Cambridge Cultural History, 9 vols (Cambridge: CUP, 1988; 1992)

Social History in Perspective Series, ed. by Jeremy Black (Basingstoke: Macmillan)　社会史、教育史を始め、大概のテーマの下に編まれた歴史書が、シリーズ中に見つかろうと思われる。文学の背景としての歴史を概説で知る上でとても有益なシリーズである。

British History in Perspective Series (Basingstoke: Macmillan)　上の姉妹シリーズで、より政治史に力点が置かれている。

The Cambridge History of the Book in Britain (Cambridge: CUP, 1999-)　現在刊行中の本格的なイギリス書物史。

安東伸介他編『イギリスの生活と文化事典』 (研究社、1982)

1.7.2. イギリスの視覚文化

Boris Ford, ed., The Cambridge Guide to Arts in Britain, 9 vols (Cambridge: CUP, 1988-89)
イギリス美術、建築について、便利な導入。

Richard D. Altick, Paintings from Books: Art and Literature in Britain, 1760-1900 (Columbus, OH: Ohio State UP, 1985)　英文学の作品を題材とした絵画作品について、総括的研究。

Ronald Paulson, Book and Painting: Shakespeare, Milton and the Bible: Literary Texts and the Emergence of English Painting (Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1982)

2. 中世

2.1. 事典類・研究案内

宮利行・松田隆美編『中世イギリス文学事典 ― 研究・文献案内』(雄松堂出版、2008)
日本で初の中世イギリス文学研究案内。

Encyclopedia of the Middle Ages, ed. by Andr□ Vauchez, in conjunction with Barrie Dobson and Michael Lapidge, trans. by Adrian Walford (Cambridge: J. Clarke, 2000)

Roger Dalrymple, ed., Middle English Literature: A Guide to Criticism (Oxford: Blackwell, 2004)

Elizabeth Solopova and Stuart D. Lee, Key Concepts in Medieval Literature (New York: Palgrave, 2007)

2.2. 校訂版、選集

全ての時代を通じて、主要作品は Penguin Classics、Everyman ュ s Library、 Oxford World ュ s Classics などのシリーズで容易に入手可能。その他の主要なアンソロジー、シリーズについて、時代別に追って紹介する。

広く中世文学を収録した翻訳の選集としては以下のものがある。

『中世文学集１・２』世界文学大系 65-66（筑摩書房）　この選集のなかの主要な作品は、ちくま文庫で読める。

『世界名詩集大成　１古代・中世』（平凡社、1960）

厨川文夫編『西欧文化への招待　４中世文学選』（グロリア・インターナショナル、1971）

2.3. 研究書、研究シリーズ

内容が特定の作家のみに限定される研究書は原則として挙げていないが、ひろく時代やテーマを論じているものはその限りではない。方法論的に興味深い示唆を与えてくれるものを中心に挙げてある。

2.3.1. 文学史

J. A. W. Bennett, Middle English Literature, ed. and complied by Douglas Gray, Oxford History of English Literature, I, 2 (Oxford: Clarendon Press, 1986)

N. F. Blake, The English Language in Medieval Literature (London: Dent, 1977)

Malcolm Godden and Michael Lapidge, The Cambridge Companion to Old English Literature (Cambridge: CUP, 1991)

D. S. Brewer, English Gothic Literature, Macmillan History of Literature (London: Macmillan, 1983)

R. D. Fulk and Christopher M. Cain, A History of Old English Literature (Oxford: Blackwell, 2002)　古英語文学史のスタンダード。

Derek Pearsall, Old English and Middle English Poetry (London: Routledge, 1977)　バランス良く読みやすい概説。

Randolph Quirk, Valerie Adams, and Derek Davy, Old English Literature: A Practical Introduction (London: Edward Arnold, 1975)　初学者向けの韻文散文テクストを附した、言語と文学への簡便な入門書。

Michael Swanton, English Literature before Chaucer (London: Longman, 1987)　古英語期ならびに中英語初期を扱っている。

David Wallace, The Cambridge History of Medieval English Literature (Cambridge: CUP, 1999)　読み応えのある中世イギリス文学史

安東伸介、岩崎春雄、 宮利行編『厨川文夫著作集』全２巻（金星堂、1981）

西脇順三郎『古代文学序説 ― 幻影の人』(1948)『西脇順三郎全集』第７巻（筑摩書房、1972）所収

[Anglo-Norman / Anglo-Latin]
中世後期のイギリスで、英語と並行して文学語として使用されていた、イギリスのラテン語とアングロ・ノルマン語の文学史
M. D. Legge, Anglo-Norman Literature and its Background (Oxford: OUP, 1963)
G. Rigg, A History of Anglo-Latin Literature 1066-1422 (Cambridge: CUP, 1992)

2.3.2. 文学研究、書物史

David Aers, ed., Culture and History 1350-1600: Essays on English Communities, Identities and Writing (London: Harvester Wheatsheaf, 1992)
M. W. Bloomfield, The Seven Deadly Sins: An Introduction to the History of a Religious Concept, with Special Reference to Medieval English Literature (1952; repr. Michigan: Michigan State UP, 1967)　中世文学に頻出する「７つの大罪」のテーマをめぐって、その宗教的起源から神学的発展を論じ、最終的に中世イギリス文学におけるテーマの展開へと到達する。
Derek Brewer, ed., Studies in Medieval English Romances: Some New Approaches (Cambridge: D. S. Brewer, 1988)
J. D. Burnley, Chaucer ュs Language and the Philosophers ュ Tradition (Cambridge: Brewer, 1979)　文学研究とフィロロジーとの架け橋となる有益な研究書。
J. A. Burrow, Medieval Writers and their Work: Middle English Literature and its Background 1100-1500 (Oxford: OUP, 1982)
William Calin, The French Tradition and the Literature of Medieval England (Toronto: University of Toronto Press, 1994)
Mary Carruthers, The Book of Memory: A Study of Memory in Medieval Culture, Cambridge Studies in Medieval Culture, 10 (Cambridge: CUP, 1990) / メアリー・カラザース『記憶術と書物 ― 中世ヨーロッパの情報文化』別宮貞徳監訳（工作社、1997）　中世における情報整理法、イメージの効用など、文化史的にも重要なテーマを具体的に扱っている。
Janet Coleman, English Literature in History 1350-1400: Medieval Readers and Writers (London: Hutchinson, 1981)
Rita Copeland, Rhetoric, Hermeneutics, and Translation in the Middle Ages: Academic Traditions and Vernacular Texts (Cambridge: CUP, 1991)
Ernst Robert Curtius, Europaische Literatur und Lateinisches Mittelalter (Bern: Francke, 1948) / E・R・クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン的中世』南大路振一他訳（みすず書房、1971）　中世文学を特徴づけているモチーフ、文体的特徴、伝統、影響関係などを豊富な具体例で論じた中世文学研究の古典。

Christopher De Hamel, A History of Illuminated Manuscripts (London: Phaidon, 1994)　中世文学の重要なメディアである彩色写本についてバランスの良い歴史的考察。
Carolyn Dinshaw and David Wallace, eds, The Cambridge Companion to Medieval Women ュs Writing (Cambridge: CUP, 2003)　Cambridge Companion の中世関係のシリーズとしては他に Chaucer, Medieval Romance, Medieval English Theatre, English Literature 1500-1600 等が刊行されている。
V. A. Kolve, Chaucer and the Imagery of Narrative: The First Five Canterbury Tales (Stanford, CA: Stanford UP, 1984)　中世文学への美術史的、図像学的アプローチの好例。
R. S. Loomis, ed., Arthurian Literature in the Middle Ages (Oxford: OUP, 1959)　中世ヨーロッパのアーサー王文学について、総括的解説。
David McKitterick, Print, Manuscript and the Search for Order, 1450-1830 (Cambridge: CUP, 2003)
Jill Mann, Feminizing Chaucer, rev. edn (Cambridge: D. S. Brewer, 2002)
Carol M. Meale, ed., Women and Literature in Britain, 1150-1500 (Cambridge: CUP, 1993)
― , ed., Readings in Medieval English Romance (Woodbridge: D. S. Brewer, 1994)
A. J. Minnis, Medieval Theory of Authorship: Scholastic Literary Attitudes in the Late Middle Ages (London: Scolar Press, 1984)
Alexander Murray, Reason and Society in the Middle Ages (Oxford: Clarendon Press, 1978)
W. A. Pantin, The English Church in the Fourteenth Century (Cambridge: CUP, 1955)
H. R. Patch, The Other World According to Descriptions in Medieval Literature (Cambridge, MA: Harvard UP, 1950; repr. New York: Octagon, 1980) / H・R・パッチ『異界 ― 中世ヨーロッパの夢と幻想』黒瀬保他訳（三省堂、1983）　中世の「ファンタジー文学」研究の古典。
Lee Patterson, Negotiating the Past: the Historical Understanding of Medieval Literature (Madison, WI: Wisconsin UP, 1987)
Beryl Smalley, The Study of the Bible in the Middle Ages, 3rd edn (Oxford: Blackwell, 1983)
H. Leith Spencer, English Preaching in the Late Middle Ages (Oxford: Clarendon Press, 1993)　中世文学の主要なジャンルのひとつである説教文学について総括的研究。
Rosemond Tuve, Allegorical Imagery: Some Medieval Books and their Posterity (Princeton, NJ: Princeton UP, 1966)　中世文学のポピュラーな形式である寓意（allegory）について、具体的に論じた研究。
Typologie des sources du moyen 曳 e occidental (Turnhout: Brepols)　中世文学、美術の様々なジャンルについて、それぞれ独立したモノグラフとしてまとめたシリーズ。本文は英語、フランス語、ドイツ語。

池上俊一『ロマネスク世界論』（名古屋大学出版会、1999）
アーロン・グレーヴィチ『同時代人の見た中世ヨーロッパ』中沢敦夫訳（平凡社、1995）
ジョルジュ・デュビィ『ヨーロッパの中世 ― 芸術と社会』池田健二・杉崎泰一郎訳（藤原書店、1995）
ヨーハン・ホイジンガ『中世の秋 ― フランスとネーデルランドにおける十四、五世紀の生活と思考の諸形態についての研究』堀越孝一訳（中央公論社、1967）

以下は情報量豊富な展覧会図録で、研究ガイドとしても本格的な論文集としても極めて有益。
Age of Chivalry: Art in Plantagenet England, 1200-1400, ed. by J. Alexander and P. Binski (London: Weidenfeld & Nicholson, 1987)
English Romanesque Art, 1066-1200 (London: Art Council, 1984)
Gothic: Art for England 1400-1547, ed. by Richard Marks and Paul Williamson (London: V and A Publications , 2003)
The Making of England: Anglo-Saxon Art and Culture AD 600-900, ed. by Leslie Webster and Janet Backhouse (London: British Museum, 1991)
Dabatino Moscati and others, The Celts (London: Thames and Hudson, 1991)
Renaissance Painting in Manuscripts: Treasures from the British Library, ed. by T. Kren (New York: Hudson Hills Press, 1983)

2.3.3. 文学の文脈
Philippe Ari 峻, Images de l ュ homme devant la mort (Paris: Seuil, 1983) / フィリップ・アリエス『図説 死の文化史 ― 人は死をどのように生きたか』福井憲彦訳（日本エディタースクール出版部、1990）
John Bossy, Christianity in the West 1400-1700 (Oxford: Oxford UP, 1985)
R. Brooke, and C. Brooke, Popular Religion in the Middle Ages: Western Europe 1000-1300 (London: Thames & Hudson, 1984)
Carolilne Walker Bynum, Jesus as Mother: Studies in the Spirituality of the High Middle Ages (Berkeley: California UP, 1982)
Michael Camille, Image on the Edge: The Margins of Medieval Art (Cambridge, MA: Harvard UP, 1992) / マイケル・カミール『周縁のイメージ ― 中世美術の境界領域』永澤峻、田中久美子訳（ありな書房、1999）
Eamon Duffy, The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England, c. 1400-c. 1580 (New Haven, CT: Yale UP, 1992)
Ronald C. Finucane, Miracles and Pilgrims: Popular Beliefs in Medieval England (London:

Dent, 1977)
C. M. Kauffmann, Biblical Imagery in Medieval England 700-1550 (London: Harvey Miller Publishers, 2003)
R. Kieckhefer, Unquiet Souls: Fourteenth-Century Saints and their Religious Milieu (Chicago: Chicago UP, 1984)
Jacques Le Goff, La Naissance du Purgatoire (Paris: Gallimard, 1981) / ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』渡邊香根夫・内田洋訳（法政大学出版局、1988）
Christopher Harper-Bill and Elizabeth Van Houts, eds, A Companion to the Anglo-Norman World (Woodbridge: Boydell Press, 2003)
Rosemary Horrox, ed., Fifteenth-Century Attitudes: Perceptions of Society in Late Medieval England (Cambridge: CUP, 1994)
Jean Leclercq, The Love of Learning and the Desire for God, trans. by C. Misrahi (New York: Fordham UP, 1961) /ジャン・ ルクレール『修道院文化入門 ― 学問への愛と神への希求』神崎忠昭、矢内義顕訳（知泉書館、2004） 中世の修道院文化について基本書。
Jean-Claude Schmitt, La raison des gestes dans l ュ Occident medieval (Paris: Gallimard, 1990) / ジャン＝クロード・シュミット『中世の身ぶり』松村剛訳（みすず書房、1996）

3. 16-17 世紀
3.1 事典類
Paul F. Grendler, gen. ed., Encyclopedia of the Renaissance, 6 vols (New York: Scribner ュ s, 1999)
『研究社シェイクスピア辞典』（研究社出版、2000）

3.2. 校訂版、選集
近代初期の詩、劇、散文については、主要作品が次のような注釈付き校訂版シリーズに収録されている。OPAC でシリーズ名を検索すれば、収録されている具体的な作品を知ることができる。
［Shakespeare］
The Oxford Shakespeare (Oxford: OUP)
The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: CUP)
The Arden Shakespeare (London: Methuen)
［Shakespeare 以外の劇］
Regents Renaissance Drama Series Publisher (London: Edward Arnold)
The Revels Plays (Manchester: Manchester UP)
［詩、劇、散文］

Oxford Poetry Library (Oxford: OUP)
Women Writers in English 1350-1850 (Oxford: OUP)
Longman Annotated Texts (London; New York: Longman)
Routledge English Texts (London: Routledge)

3.3. 研究書、研究シリーズ

3.3.1. 文学史

James Simpson, The Oxford English Literary History, Volume 2, 1350-1547 : Reform and Cultural Revolution, (Oxford: OUP, 2002)

この時代に関しては、Cambridge Companions to Literature のシリーズがジャンル別にカバーしており、バランスの良い導入書となってくれる。

A. R. Braunmuller and Michael Hattaway, eds, The Cambridge Companion to English Renaissance Drama (Cambridge: CUP, 1990)

Margreta de Grazia and Stanley Wells, eds, The Cambridge Companion to Shakespeare (Cambridge: CUP, 2001)

Thomas N. Corns, ed., The Cambridge Companion to English Poetry: Donne to Marvell (Cambridge: CUP, 1993)

Arthur Kinny, ed., The Cambridge Companion to English Literature, 1500-1600 (Cambridge: CUP, 2000)

Steven N. Zwicker, ed., The Cambridge Companion to English Literature, 1650-1740 (Cambridge: CUP, 1998)

3.3.2. 文学研究、書物史

C. L. Barber, Shakespeareュs Festive Comedy: A Study of Dramatic Form and its Relation to Social Custom (Princeton, NJ: Princeton UP, 1959; repr. 1972) / C. L. バーバー『シェイクスピアの祝祭喜劇 ― 演劇形式と社会的風習との関係』玉泉八州男他訳（白水社、1979）

Anne Barton, Shakespeare and the Idea of the Play (London: Chatto & Windus, 1962) / アン・バートン『イリュージョンの力 ― シェイクスピアと演劇の理念』青山誠子訳（朝日出版、1981）

Juliet Dusinberre, Shakespeare and the Nature of Women (London: Macmillan, 1975) / ジュリエット・デュシンベリー『シェイクスピアの女性像』森祐希子訳（紀伊国屋書店、1994）

Terry Eagleton, William Shakespeare (Oxford, New York: B. Blackwell, 1986) / テリー・イーグルトン『シェイクスピア ― 言語・欲望・貨幣』大橋洋一訳（平凡社、1992）

Angus Fletcher, Allegory: The Theory of a Symbolic Mode (Ithaca, NY: Cornell UP, 1964) 17 世紀までポピュラーな文学手法であった寓意についての基本書。

Alastair Fowler, Renaissance Realism: Narrative Images in Literature and Art (Oxford: OUP, 2003)

Stephen Greenblatt, Hamlet in Purgatory (Princeton, NJ: Princeton UP, 2001)

― , Renaissance Self-Fashioning (Chicago: University of Chicago Press, 1980) / S・グリーンブラット『ルネサンスの自己成型』高田茂樹訳（みすず書房、1992） 新歴史主義批評でイギリス・ルネサンスをとらえた古典的研究。

― , Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England (Oxford: Clarendon Press, 1988) / スティーブン・グリーンブラット『シェイクスピアにおける交渉 ― ルネサンス期イングランドにみられる社会的エネルギーの循環』酒井正志訳（法政大学出版局、1995）

Frank Kermode, Shakespeare, Spenser, Donne (London: Routledge, 1971)

Raymond Klibansky, Erwin Panofsky, and Fritz Saxl, Saturn and Melancholy: Studies in the History of Natural Philosophy, Religion and Art (London: Thomas Nelson, 1964) / レイモンド・クリバンスキー、アーウィン・パノフスキー、フリッツ・ザクセル『土星とメランコリー ― 自然哲学、宗教、芸術の歴史における研究』榎本武文他訳（晶文社、1991）メランコリーというひとつの気質を、美術史、科学史、文学史、哲学史など複数の視点から捉えて、その展開を古典から近代まで論じた大著。

Jan Kott, The Bottom Translation: Marlowe and Shakespeare and the Carnival Tradition (Evanston: Northwestern UP, 1987) / ヤン・コット『シェイクスピア・カーニヴァル』高山宏訳（平凡社、1989）

― , Shakespeare Our Contemporary, trans. by Boleslaw Taborski (London: Methuen, 1970) / ヤン・コット『シェイクスピアはわれらの同時代人』蜂谷昭雄・喜志哲雄訳（白水社、1992）

Barbara K. Lewalski, Protestant Poetics and the Seventeenth-Century Religious Lyric (Princeton, NJ: Princeton UP, 1979)

Barbara K. Lewalski, Writing Women in Jacobean England (Cambridge, MA: Harvard UP, 1993)

C. S. Lewis, The Discarded Image: An Introduction to Medieval and Renaissance Literature (Cambridge: CUP, 1964)

Louis L. Martz, The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century, rev. edn (New Haven, CT: Yale UP, 1962)

C. A. Patrides, Figures in a Renaissance Context, ed. by C. J. Summers and Ted-Larry Pebworth (Ann Arbor, MI: Michigan UP, 1989)

Mario Praz, Studies in Seventeenth-Century Imagery, 2 parts, 2nd edn (Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 1964-74) / マリオ・プラーツ『綺想主義研究 ― バロックのエンブレム類典』伊藤博明訳（ありな書房、1999）　英語版はイタリア語原典―Studi sul Concettismo (Firenze: G. C. Sansoni, 1946)―の増補版。
マリオ・プラーツ『官能の庭 ― マニエリスム・エンブレム・バロック』若桑みどり他訳（ありな書房、1992）
Paul Salzman, English Prose Fiction, 1558-1700 (Oxford: Clarendon Press, 1985)　小説に先立つ散文フィクションの総合的研究。
Wylie Sypher, Four Stages of Renaissance Style (New York: Doubleday, 1955) / ワイリー・サイファ『ルネサンス様式の四段階 ― 1400 年〜1700 年における文学・美術の変貌』河村錠一郎訳（河出書房新社、1987）
Robert Weimann, Shakespeare and the Popular Tradition in the Theater, ed. by Robert Schwartz (Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1978) / R・ヴァイマン著、R・シュワーツ編『シェイクスピアと民衆演劇の伝統』青山誠子・山田耕士訳（みすず書房、1986）
川崎寿彦『鏡のマニエリスム ― ルネッサンス想像力の側面』（研究社、1978）
ミハイール・バフチーン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳（せりか書房、1980）

3.3.3. 文学の文脈

Paul Barolsky, Infinite Jest: Wit and Humour in Italian Renaissance Art (Columbia, MI: University of Missouri Press, 1978) / ポール・バロルスキー 『とめどなく笑う ― イタリア・ルネサンス美術における機知と滑稽』高山・伊藤・森田訳（ありな書房、1993）
Peter Burke, Popular Culture in Early Modern Europe (Aldershot, Hants: Wildwood House, 1978) / ピーター・バーク『ヨーロッパの民衆文化』中村賢二郎・谷泰訳（人文書院、1988）
― , The European Renaissance (Oxford: Blackwell, 1998)
Edward Chaney, The Evolution of the Grand Tour: Anglo-Italian Cultural Relations since the Renaissance (London: Frank Cass, 1998)
G. Dickens, The English Reformation (London: B. T. Batsford, 1964)
Lucy Gent, ed., Albionュs Classicism: The Visual Arts in Britain, 1550-1660, Studies in British Art, 2 (New Haven, CT: Yale UP, 1995)
E. H. Gombrich, Symbolic Images: Studies in the Art of the Renaissance (London: Phaidon, 1972)
Karen Hearn, ed., Dynasties: Painting in Tudor and Jacobean England 1530-1630 (London: Tate Gallery, 1995)

Lisa Jardine, Worldly Goods: A New History of the Renaissance (London: Macmillan, 1997)
Paul Oscar Kristeller, Renaissance Thought: The Classic, Scholastic, and Humanisit Strains (New York: Harper, 1961) / P・O・クリステラー『ルネサンスの思想』渡辺守道訳（東京大学出版会、1977）
Rosemary Oュ Day, The Longman Companion to the Tudor Age (London: Longman, 1995)
Lawrence Stone, The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800 (London: Penguin, 1977) / L・ストーン『家族・性・結婚の社会史 ― 1500 年-1800 年のイギリス』北本正章訳（勁草書房、1991）
Keith Thomas, Religion and the Decline of Magic: Studies in Popular Beliefs in Sixteenth- and Seventeenth-Century England (London: Penguin, 1971) / キース・トマス『宗教と魔術の衰退』荒木正純訳、全２冊（法政大学出版局、1993）
Roy Strong, The English Icon: Elizabethan and Jacobean Portraiture (London: Routledge, 1969)　ルネサンス期の王族、貴族の肖像画を画家別に、同時代の歴史的事件と関連させながら論じた画集。
Frances A. Yates, The Art of Memory (Chicago: Chicago UP, 1966) / フランセス・イエイツ『記憶術』玉泉八州男監訳（水声社、1993）　中世から近代初期にかけて存在した体系化された記憶術について、芸術活動と関連付けて考察している。Yates には他に、エリザベス朝の劇場のコンセプトを論じた Theatre of the World (1969)、十六世紀の王権論をエリザベス一世とのかかわりで論じた Astrea: The Imperial Theme in the Sixteenth Century (1975)、さらに、エリザベス朝の神秘的、オカルト的思想をシェイクスピアと関連付けて論じた The Occult Philosophy in the Elizabethan Age (1979)などの著作がある。いずれも邦訳あり。
Anthony Wells-Cole, Art and Decoration in Elizabethan and Jacobean England (New Haven, CT: Yale UP, 1997)
フィリップ・アリエス 『〈子供〉の誕生 ― アンシァン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信・杉山恵美子訳（みすず書房、1980）
ジャン・セズネック『神々は死なず ― ルネサンス芸術における異教神』高田勇訳（美術出版社、1977）
若桑みどり『マニエリスム芸術論』ちくま学芸文庫（筑摩書房、1994）

4. 18 世紀

4.1. 事典類

Martin C. Battestin, ed., British Novelists, 1660-1800, 2 vols (Detroit: Gale Research, 1985)

4.2. 校訂版、選集

Harold E. Pagliaro, ed., Major English Writers of the Eighteenth Century (New York: Free, 1969)　18 世紀の主要な文人たちの代表作を収めた便利なアンソロジー。

4.3. 研究書、研究シリーズ

4.3.1. 文学史

Gillian Beer, ed., The English Novel in History Series (London: Routledge)　個別の作品に対し、ある限られた時代の文学を歴史的見地から検証したシリーズ。

Steven N. Zwicker, The Cambridge Companion to English Literature, 1650-1740 (Cambridge: CUP, 1998)　18 世紀イギリス文学の通史に関しては、〝Cambridge Companions to Literature〟シリーズが、資料・リサーチの正確さ、扱うテーマに関する目配りの広さ、新しい研究・批評動向への配慮の良さの点で、群を抜いている。本書は 17 世紀後半から小説発生直前の 18 世紀中期までの詩・戯曲・散文文学について概略する。

Greg Clingham, The Cambridge Companion to Samuel Johnson (Cambridge: CUP, 1997) Samuel Johnson に関するトピックが中心ではあるが、各分野・ジャンルに多彩な活動を残した作家であるので、必然的に他作家や文学動向全般に関する様々なトピックと連動している。よって、ジョンソンを専門としない研究者も参照すべき通史的文献。

4.3.2. 文学研究、書物史

J. Paul Hunter, Before Novels: The Cultural Contexts of Eighteenth-Century English Fiction (New York: Norton, 1990)　小説発生の背後にある社会変容について木目細かく論述しており、入門書としても最適。

Carol Kay, Political Construction: Defoe, Richardson and Sterne in Relation to Hobbes, Hume and Burke (Ithaca, NY: Cornell UP, 1988)　政治思想史との関連で 18 世紀イギリス小説史を考察した個性的な研究。

Richard Kroll, ed., The English Novel, 2 vols, Longman Critical Readers (New York: Longman, 1998)　各作家・各トピックについて優れた先行研究を抜粋・編集した、アンソロジーであり、18 世紀イギリス小説研究・批評の入門書として最適。

Michael McKeon, The Origins of the English Novel, 1600-1740, 15th anniversary edn (Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 2002)　思想史・社会史の新しい知見を基に Watt 理論の書き直しを目指した名著の新版。

John Richetti, ed., The Cambridge Companion to the Eighteenth Century Novel (Cambridge: CUP, 1996)　小説史全体の流れと個々の小説家の仕事についてわかりやすく論述しており、第一段階の入門書として優れている。

―, The English Novel in History, 1700-1780, The Novel in History (London: Routledge, 1999)　新しい研究・批評動向を配慮し、また歴史・政治・文化など広範囲にわたるトピックを網羅しながら、18 世紀イギリス小説の成り立ちと発展を丹念に追う、18 世紀小説通史の決定版。

John Sitter, ed., The Cambridge Companion to Eighteenth Century Poetry (Cambridge: CUP, 2001)　古典主義からロマン主義へと移行した 18 世紀イギリス詩の動向を項目ごとに詳述した研究書。研究に幅広く活用できる。

Ian Watt, The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding (Berkeley: University of California Press, 1957)　18 世紀のイギリスで小説という新ジャンルが発生した背景と理由について、基本的研究。

海保真夫『文人たちのイギリス 18 世紀』(慶應義塾大学出版会、2001)　演劇と政治、文学と法律、あるいは同性愛、賭け事、ポルノグラフィーといった、18 世紀的なトピックに焦点を当てて主要な文学者たちの諸相を論じた研究書。格好の入門書であると同時に、研究テーマや研究の方法論についても有益な示唆を与えてくれる。

4.3.3. 文学の文脈

J. G. A. Pocock, ed., The Varieties of British Political Thought, 1500-1800 (Cambridge: CUP, 1993)　近代英国の政治思想について、各界の研究者が寄せた論考をまとめた論文集。この種の書としては最初のもので、重要。

Roy Porter, The Creation of the Modern World: The Untold Story of the British Enlightenment (New York: Norton, 2000)　文化史に焦点を当てた概説書として優れており、論文のテーマや視点を模索する上でも、多くのヒントを与えてくれる。

―, English Society in the Eighteenth Century (London: Pelican, 1982) / ロイ・ポーター『イングランド 18 世紀の社会』目羅公和訳（法政大学出版局、1996）　18 世紀イギリスの政治・思想・社会史を概観する、18 世紀イギリス史の最も優れた入門書。

W. A. Speck, Literature and Society in Eighteenth-Century England: Ideology, Politics and Culture, 1680-1820 (London: Longman, 1998)　主に文学の動きと縁の深い政治・文化史上のトピックに焦点を当てており、使い勝手もよい。

Barbara Maria Stafford, Artful Science (Cambridge, MA: MIT Press) / バーバラ・M・スタフォード『アートフル・サイエンス ― 啓蒙時代の娯楽と凋落する視覚教育』高山宏訳（産業図書、1997）　18 世紀の視覚文化が当時の思想、文化に与えた変貌を説く。

小林章夫『コーヒー・ハウス ― 18 世紀ロンドン、都市の生活史』講談社学術文庫（講談社、2000）　ロンドン都市生活者の文化を概観する上で最良の書。

森洋子編『ホガースの銅版画 ― 英国の世相と諷刺』双書美術の泉、48（岩崎美術社、1981）　18 世紀イギリスを代表する画家 William Hogarth の代表作を集めた画集。当時のイギリスの世相や風俗を知る格好の手助けとなろう。

5. 19 世紀

5.1. 事典類

Encycropedia of Romanticism: Culture in Britain, 1780s-1830s, ed. by Laura Dabundo (New York: Routledge, 1992)

John Andrew Sutherland, The Longman Companion to Victorian Fiction (Harlow: Longman, 1988)　作品単位で引くことのできるヴィクトリア朝小説の事典。

5.2. 校訂版、選集

各作家ごとに編まれた全集が出版されている場合は校訂の質の高さにおいて勝るので全集の利用が望ましい。また、主要作品を収録したアンソロジーとして 19 世紀の研究に特に利用価値の高いものを以下に挙げる。

Jerome J. McGann, ed., The New Oxford Book of Romantic Period Verse (Oxford: OUP, 1993)　1785 年から 1832 年にかけて発表された重要な詩を、作家別ではなく出版年ごとに並べた選集。時代の変遷や作品間の影響関係を見てとるのに適している。

Duncan Wu, ed., Romanticism: An Anthology, Blackwell Anthologies, 3rd edn (Oxford: Blackwell, 2006)　広く 18 世紀半ばから 19 世紀半ばにかけて、韻文･散文をバランスよく編集したアンソロジー。

Valentine Cunningham, ed., The Victorians: An Anthology of Poetry and Poetics, Blackwell Anthologies (Oxford: Blackwell, 2000)　社会的背景を重んずる註釈が詩を研究する上で大変役に立つ。

The Nineteenth-Century Novel Series (London: Routledge in association with the Open University, 2001)　19 世紀文学を総合的に扱う、散文、批評を中心に掲載したアンソロジー。

5. 3. 研究書、研究シリーズ

5.3.1. 文学史

Joseph Bristow, ed., The Cambridge Companion to Victorian Poetry (Cambridge: CUP, 2000) ヴィクトリア朝の詩を概観しつつ、基本的な研究方法の例を示す利用価値の高い詩の文学史。詩を理解する様々な視点を得る上で有益。

Michael Booth, ed., English Plays of the Nineteenth Century, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1969-76)　19 世紀の戯曲、舞台を総合的に説く貴重な概説書。サブ・ジャンルごとに分かれているので、辞書としての利用も可能。

Stuart Curran, The Cambridge Companion to British Romanticism (Cambridge: CUP, 1993) ロマン主義の研究を始めるにあたって、その全体的な運動と現在までの評価を満遍なく知る上で最適。

Deirdre David, ed. The Cambridge Companion to the Victorian Literature (Cambridge: CUP, 2001)　ヴィクトリア朝文学の研究を始めるにあたり有益な、基本的な情報と典型的な研究方法の例や多角的な視点を得ることができる。

Douglas Hewitt, English Fiction of the Early Modern Period, 1890-1940, Longman Literature in English Series (London: Longman, 1988)　世紀末の文学を、モダニズムとそれ以降の文学まで延長する大きな流れと捉え、紹介する。世紀末文学理解のためにはもとより、20 世紀文学への影響を過去へ辿る際も有益。

Gary Kelley, English Fiction of the Romantic Period, 1789-1830, Longman Literature in English Series (1985; London: Longman, 1989)

J. R. Watson, English Poetry of the Romantic Period, 1789-1830, Longman Literature in English Series (London: Longman, 1990)　この２冊は、ロマン主義文学全体を通じて作家と詩作品を時代との関わりから最も簡潔に紹介している研究シリーズに所収。

Bernard Richards, English Poetry of the Victorian Period, 1830-1890, Longman Literature in English Series (1985; London: Longman, 1988)

Michael Wheeler, English Fiction of the Victorian Period, 1830-1890, 2nd edn, Longman Literature in English Series (1985; London: Longman, 1994)　ヴィクトリア朝の作家と小説作品を時代との関わりから最も簡潔に紹介している研究シリーズの一冊。

5.3.2. 文学研究、書物史

Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture Series, gen. ed. by Gillian Beer (Cambridge: CUP)　19 世紀の文学作品に新たな文化的視点を持ち込んで論じる、新鮮味の豊かなシリーズ。

M. H. Abrams, The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition (Oxford: OUP, 1953) / Ｍ・Ｈ・エイブラムズ『鏡とランプ ― ロマン主義理論と批評の伝統』水之江有一訳（研究社出版、1976）

― , Natural Supernaturalism: Tradition and Revolution in Romantic Literature (New York: Norton, 1973) /『自然と超自然 ― ロマン主義理念の形成』吉村正和訳（平凡社、1992）

上掲二書は、英独を中心にロマン主義文学・批評の特徴を論じた古典的名著。現在の研究はエイブラムズによって確立された「ロマン主義」という統一概念を問い直すところから始まっている。

Homi K. Bhabha, The Location of Culture (London: Routledge, 1994)　文化と場の問題を論じる際にある程度の方向性を与えてくれる大変有益な研究書。

Marylyn Butler, Romantics, Rebels & Reactionaries: English Literature and its Background 1760-1830 (Oxford: OUP, 1981)　いわゆる「ロマン派文学」を概念の面からではなく、

同時代の歴史的事象として捉えて論じている、鋭い問題意識に支えられた好著。入門書としても好適。

J. Don Vann and Rosemary T. VanArsdel, Victorian Periodicals and Victorian Society (Aldershot: Scolar Press, 1994)　出版が担う文化的な重要性を、特にジャーナリズムを通じて論じており、新たな研究もかなり反映されていながら、入門書としても最適な一冊。

Linda Dowling, Hellenism and Homosexuality in Victorian Oxford (Ithaca, NY: Cornwall UP, 1994)

Tim Fulford and Peter J. Kitson, Romanticism and Colonialism: Writing and Empire, 1780-1830 (Cambridge: CUP, 1998)　帝国主義的な国家の成立の原動力としてロマン主義を捉える研究において、本書が基本的な情報と問題点を与えてくれるので有益である。

William H. Greenslade, Degeneration, Culture and the Novel, 1880-1940 (Cambridge: CUP, 1994)　世紀末に人々を不安に陥れた退化というキーワードを巡る文化的な研究の方向性を作り出すのに大きく貢献した研究書。

Jon P. Klancher, The Making of English Reading Audiences, 1790-1832 (Madison, WI: U of Wisconsin P, 1987)　英国ロマン派時代の「読者の形成」を論じた研究書。中流読者層の成立とロマン主義文学との関わりあいを理解するために重要な助けとなる。

Jerome J. McGann, The Romantic Ideology: A Critical Investigation (Chicago: U of Chicago P, 1983)　「ロマン主義」という概念がどのようにして後世作り出され、現代文学批評がいかにそのイデオロギーに支配されてきたかを問うた革新的著作。必読。

Gordon Marsden, ed., Victorian Values: Personalities and Perspectives in Nineteenth Century Society, 2nd edn (London: Longman, 1998)　ヴィクトリア朝の文学・文化に関する評論集。研究の視点のヒントを得、方法を学ぶのに適している代表的な評論が収められている。評論を通じて時代を知る上でも最適。

Janet Oppenheim, The Other World: Spiritualism and Psychical Research in England, 1850-1914 (Cambridge: CUP, 1985)

Elaine Showalter, Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Si縦le (London: Virago, 1968)　こと世紀末に至って多様な像を以て示され始めた女性観を通じて、時代のセクシュアリティの問題を扱っている。

William St Clair, The Reading Nation in the Romantic Period (Cambridge: CUP, 2004)　出版部数などといったデータの詳細な分析から、当時の文化・思想がどのように形成されたかを初めて明らかにした研究書。大部だが研究者・学生ともに必読。

Pamela Thurschwell, Literature, Technology and Magical Thinking, 1880-1920 (Cambridge: CUP, 2001)

Robin W. Winks and James R. Rush, Asia in Western Fiction, Studies in Imperialism, gen. ed. by John M. MacKenzie (Manchester: Manchester UP, 1990)　この分野の研究書では初学者に最適。

5.3.3. 文学の文脈

The Short Oxford History of the Modern World Series, gen. ed. by J. M. Roberts (Oxford: OUP)　各視点に注目した時の近代史を足早に辿ることができる。小説を理解する上で必要な傍系の歴史を知る際に特に便利。

Richard Daniel Altick, The Shows of London (Cambridge, MA: Belknap Press, 1978)　近代ロンドンに華開いた大衆娯楽文化を、奇集展示、発明、演劇、畸形見世物などを含め、余すところなく論じている。

―, Victorian People and Ideas: A Companion for the Modern Reader of Victorian Literature (New York: Norton, 1973)　ヴィクトリア朝の人々とその思想を、文学を通じて紹介する。入門書にも向いている。また、文学の研究方法の具体例としても一読を勧める。

Asa Briggs, Victorian Cities, new edn (1963; London: Ohdam Press, 1968)　都市文化論の入門書。近代的な都市の成立と文学、文化の関係を捉える。

James Chandler, England in 1819: The Politics of Literary Culture and the Case of Romantic Historicism (Chicago: U of Chicago P, 1998)　近代の歴史認識の萌芽を 1819 年前後の激動の時代において、当時の文学作品と政治状況との関係を解きほぐした重要な研究書。

Linda Colley, Britons: Forging the Nation 1707-1837, 2nd Pimlico edn (London: Pimlico, 2003) / リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』川北稔訳（名古屋大学出版会、2000 年）　四つの国からなる大英帝国の人々が、どのようにして「イギリス人」という自己認識を形成するに到ったか、綿密な資料調査に基づきいくつかの観点から論じた研究書。

Robin Gilmour, The Victorian Period: The Intellectual and Cultural Context of English Literature, 1830-1890, Longman Literature in English Series (London: Longman, 1993)　ヴィクトリア朝の人と思想を知る上でやはり有益な一冊。

Christopher Harvie and H. C. G. Matthew, Nineteenth-Century Britain: A Very Short Introduction, Very Short Introductions (1994; Oxford: OUP, 2000)　入門書として最適。

Jose Harris, Private Lives Public Spirit: A Social History of Britain, 1870-1914 (Oxford: OUP, 1993)　社会の意識史について展開した書としては白眉。近代文学の背景にある意識を知る上で通常の歴史よりも利用価値が高い。

Mario Praz, The Hero in Eclipse, trans. by Angus Davidson (Oxford: OUP, 1956)　小説作品と絵画にみる人物の捉え方の変遷を追った書。別種の芸術を平行して論ずる上での方法論を学ぶことができる。

小池滋『ロンドン ― ほんの百年前の物語』中公新書（中央公論社、1978）　近代ロンドンの勃興とその社会を論じたものとしては、現在もなお最良の書。

6. 20 世紀以降

6.1. 事典類

Eugene Benson and L.W. Conolly, eds, Encyclopedia of Post-Colonial Literatures in English, 2 vols (London: Routledge, 1994)　コモンウェルスの文学について調べたいときに有益な事典。

Ian Hamilton, ed., The Oxford Companion to Twentieth-Century Poetry in English (Oxford: OUP, 1994)　主要な詩人については著名な詩人＝批評家が執筆を担当し、深い洞察に満ちた解説を書いている。

Alex Preminger and T. V. F. Brogan, eds, The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics, 3rd edn (Princeton: Princeton UP, 1993)　詩の歴史、技法、理論、批評に関する最も網羅的な辞典。

6.2. 校訂版、選集

20 世紀イギリス文学の主要作品はとくに Penguin Books、Penguin Twentieth Century Classics、Oxford World ュs Classics などのシリーズが充実している。マイナーな女性作家の作品を探すときには、まず Virago Press にあたるとよい。

6.3. 研究書、研究シリーズ

6.3.1. 文学史

Malcolm Bradbury, The Modern British Novel (Harmondsworth: Penguin,1993)　小説のみに限った 20 世紀史なので歴史と小説の相関関係と流れが追いやすい。

Peter Conrad, Modern Times, Modern Places (London: Thames & Hudson, 1998)　20 世紀史の中に芸術的、知的動向を巧みに織り交ぜた良書。

David Perkins, A History of Modern Poetry, I: From the 1890s to the High Modernist Mode (Cambridge, MA: Harvard UP, 1976) / A History of Modern Poetry, II: Modernism and After (Cambridge, MA: Harvard UP, 1989)　英米詩壇の連関に目を配りながら、双方を非常にバランス良く記述している。また現代英詩の発展に貢献したアイルランドの詩人達にもページを割いている。

Elaine Showalter, A Literature of their Own: British Women Novelists from Bront□ to Lessing (Princeton: Princeton UP, 1977) / E・ショウォールター『女性自身の文学』川本静子・鷲見八重子・岡村直美・窪田憲子共訳（みすず書房、1993）　忘れ去られてきた女性文学を再発見していく動向のごく初期の著作。

Simon Trussler, The Cambridge Illustrated History of British Theatre (Cambridge: CUP, 1994)　演劇史が良心的にまとめられている。入門書として最適。

6.3.2. 文学研究、書物史

Judith Butler, Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity (New York: Routledge, 1990) / ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳（青土社、1999）　ジェンダーの問題をフェミニズムの立場から論じた古典的名著。

Paul Cobley, Narrative, New Critical Idiom Series (London: Routledge, 2001)　ナラティヴとは何かということを知るための入門書としては最適。

Steven Conner, The English Novel in History, 1950-95, The English Novel in History Series (London: Routledge, 1993)

David Trotter, The English Novel in History, 1895-1920, The English Novel in History Series (London: Routledge, 1993)　上記２冊は１つ１つの章で、その時代を考える際に重要な鍵となるテーマをとりあげ、数多くの小説を論じている。現実の歴史と文学の相互関係がよくわかるので一読を薦める。

Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, No Manュs Land: The Place of the Woman Writers in the Twentieth Century, 3 vols (New Haven, CT: Yale UP, 1988-94)　19 世紀末から 20 世紀にかけて徐々に性の境界が揺らぎ女性作家が台頭していく行程を論じた書。

Margaret Randolph Higonnet, Jed Jenson, Sonya Michel, and Margaret Collins Weitz, eds, Behind the Lines: Gender and the Two World Wars (New Haven, CT: Yale UP, 1987)

Peter Childs, Modernism, New Critical Idiom Series (London: Routledge, 2000)

Samuel Hynes, The Auden Generation: Literature and Politics in England in the 1930s (London: Faber, 1976)

Frank Kermode, Romantic Image (London: Routledge, 1957)　ロマン主義文学に表れる諸イメージの分析とその後世への継承の論究。

Mario Praz, The Romantic Agony, trans. by Angus Davidson, 2nd edn (Oxford: OUP, 1970) / マリオ・プラーツ『肉体と死と悪魔 ― ロマンティック・アゴニー』倉智恒夫他訳（国書刊行会、1986）　サド以降、スウィンバーン、ワイルドといった作家の病理性を探る。

Edward Said, Culture and Imperialism (New York: Knopf, 1993) / エドワード・W・サイード『文化と帝国主義』大橋洋一訳、全２巻（みすず書房、1998-2001）　文化と帝国主義を関連付けて論じた名著。20 世紀初頭を研究テーマに選ぶのであれば必読。

Eve Kosofsky Sedgwic, Epistemology of the Closet (Berkeley: University of California Press, 1990) / イヴ・コゾフスキー・セジウィック『クローゼットの認識論』外岡尚美訳（青土社、1999）　文学における同性愛を論じたい学生は必読。

Elaine Showalter, ed., The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature and Theory (London: Pantheon, 1985) / エレイン・ショーウォーター編『新フェミニズム批評 ― 女性・文学・理論』青山誠子訳（岩波書店、1990）
Randall Stevenson, Modernist Fiction: An Introduction (New York: Harvester Wheatsheaf, 1992)　時間、空間の捉え方を中心にモダニズムの作家たちを分析した書。モダニズム文学の読み方、論じ方の１つのヒントを与えてくれる。
Edmund Wilson, Axel ュ s Castle (New York and London: Scribner, 1931)　イェイツ、エリオット、ジョイス、プルースト、ヴァレリー他象徴主義作家の共通性を探った論。邦訳あり。
20 世紀英文学研究会編『二十世紀英文学研究』シリーズ、全６巻（金星堂、1986-99）20 世紀文学における重要な作家、テーマを網羅的にカバーしているので入門書として適している。
現代女性作家研究会編『イギリス女性作家の半世紀』シリーズ、全５巻（勁草書房、1999-2000）　1950 年代から 90 年代までに活躍した女性文学を 10 年単位にまとめながら論じたシリーズ。戦後女性文学への入門書として適している。

6.3.3. 文学の文脈
Clive Bloom, ed., Literature and Culture in Modern Britain, 3 vols (London: Longman, 1993-2000)　詩や小説に限らず 20 世紀文化の形成に大きな役割を果たした映画や音楽、テクノロジーなどにも着目しつつ、文化史を論じた書。研究テーマを探すヒントを得る上でも有益。
Malcolm Bradbury, The Social Context of Modern English Literature (New York : Schocken, 1971)　20 世紀文学の社会的背景を知る入門書としてはいまだに非常に有益。分かりやすくコンパクトにまとまっている。
Malcolm Bradbury and James McFarlane, eds, Modernism: A Guide to European Literature, 1890-1930 (1976; Harmondsworth: Penguin, 1991) / マルカム・ブラッドベリ、ジェームズ・マックファーレン編著『モダニズム』橋本雄一訳、全２巻（鳳書房、1990-92）モダニズム論の古典的名著。
Seymour Chatman, Coming to Terms: The Rhetoric of Narrative in Fiction and Film (Ithaca, NY: Cornell UP, 1990) / シーモア・チャトマン『小説と映画の修辞学』田中秀人訳（水声社、1998）　「小説」と「映画」における多くの作品を緻密に分析すると同時に、「物語学」における既成のタームを批判的に検討し、「物語学」そのものをも問い直している書。
Bram Dijkstra, Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Si 縦 le Culture (Oxford: OUP, 1986) / ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像 ― 世紀末幻想としての女性悪』富士川義之他訳（パピルス、1994）　19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての絵画にあらわれる女性たちについて論じた書。
Stephen Kern, The Culture of Time and Space, 1880-1918 (Cambridge, MA: Harvard UP, 1983) / スティーヴン・カーン『時間と空間の文化 ― 1880-1918 年』浅野敏夫訳、上下巻（法政大学出版局、1993）　19 世紀末から第一次世界大戦にかけての、科学技術と文化における飛躍的な革新と、それにともなう時間・空間にかかわる認識と経験の変化を論じた書。
Alan Sinfield, Society and Literature, 1945-1970: The Context of English Literature (London: Methuen, 1983)　第二次世界大戦後の文学が、イギリスの政治的、文化的動向の詳細な検討のもとに論じられている。
（松田隆美・ 橋勇・中川千帆・上田敦子・小川真理・高橋三和子・大井美弥・久米清香編）

アメリカ文学

㈱. 文学史
(1) Bercovitch, Sacvan, ed. The Cambridge History of American Literature. New York: CUP, 1994-. Vol.1+ 全８巻の予定だが、現在なお刊行中の最新のアメリカ文学史。それぞれの時代やジャンルを各分野の第一人者が、単著レベルの分量と深度で分析している。巻末の年表も詳しい。
(2) Elliott, Emory, et al., eds. Columbia History of the United States. New York: Columbia UP, 1988. 文学史における人種やジェンダーの問題などを取り上げ、現代文学、サブカルチャーへの目配りも充実している一巻本のアメリカ文学史。時代別にも主題別にも楽しめる。邦訳・山口書店。
(3) Elliott, Emory, et al., eds. Columbia History of the American Novel. New York: Columbia UP, 1991. 前掲書の姉妹編。新歴史主義批評の方法論で再構築された、おそらくは最も詳細なアメリカ小説史。ジャンル理論から文学史上の分析、多民族文学の可能性まで、各章は各トピックの第一人者の筆による。
(4) High, Peter. An Outline of American Literature. New York: Longman, 1986. 最もコンパクトなアメリカ文学史。英語も平易でわかりやすい。引用・写真・図版が充実している。邦訳・桐原書店。
(5) Hollinger, David A., and Charles Capper, eds. The American Intellectual Tradition. 3rd ed. New York: OUP, 1997. 2vols. アメリカ精神史を原典からの抜粋で示すアンソロジー。各作品に簡潔な説明がついている。

(6) Ruland, Richard, and Malcom Bradbury. From Puritanism to Postmodernism. New York: Viking, 1991. 植民地時代文学から現代文学までを網羅した文学史。
(7) Spiller, Robert, et al., eds. Literary History of the United States. 4th rev. ed. New York: Macmillan, 1974. 2 vols. 長きにわたり、アメリカ文学史の定番と言われた文学史。
(8) 岩本巌・酒元雅之『コンパクト　アメリカ文学史』荒竹出版、1980 年。
(9) 大橋健三郎ほか『総説アメリカ文学史』研究社、1979 年。アメリカン・ルネサンスの項目がとくに充実している。
(10) 亀井俊介『アメリカ文学史講義』南雲堂、1997-2000 年。全３巻。
(11) 國重純二編『アメリカ文学ミレニアム』南雲堂、2001 年。全２巻。植民地時代から現代まで、46 名の研究者による論考を収録。通読すれば今日もっとも先鋭的な「文学史」の諸問題が浮かび上がる。
(12) 斎藤勇『アメリカ文学史』改訂版、研究社、1977 年。
(13) 巽孝之『アメリカ文学史　駆動する物語の時空間』改訂版。慶應義塾大学出版会、2004 年。アメリカ文学の誕生をヴァイキング・サーガまでさかのぼり、一千年を射程に入れた画期的な文学史。現代文学も充実。
(14) 巽孝之・渡部桃子『物語のゆらめき ― アメリカン・ナラティヴの意識史』南雲堂、1998 年。アメリカン・ナラティヴの伝統から植民地時代より 20 世紀まで、詩・演劇・散文にわたって包括的に分析する共同研究。
(15) 福田陸太郎・岩本巌『アメリカ文学思潮史 ― 社会と文学（増補版）』1975 年に出版された名著が、増補版となって復刊された。植民地から現代にいたるアメリカ思潮史について文学作品を手がかりに解説。とくに文学植民地時代から啓蒙主義、超絶主義への流れを説明した箇所は白眉。
(16) 別府恵子・渡辺和子『新版・アメリカ文学史 ― コロニアルからポストコロニアルまで』ミネルヴァ書房、2000 年。思潮史をふまえたアメリカ文学史。詩・小説・演劇・批評などのジャンル別の説明が丁寧でわかりやすい。

㈱. 事典・研究案内

(1) 20th Century American Literature. London: Macmillan, 1980. 一次資料のビブリオ作成向け。
(2) American Literature to 1900. London: Macmillan, 1980. 一次資料のビブリオ作成向け。
(3) Andrews, William L., et al., eds. The Oxford Companion to African American Literature. New York: OUP, 2001. 作家、作品、批評用語などを網羅した事典。巻末の年表も便利。
(4) Blain,Virginia, et al., eds. The Feminist Companion to Literature in English. London: Batsford, 1990. 中世から 1980 年代にいたる女性作家に関する簡潔なコメントがついている。

(5) Clute, John, and Peter Nicholls. The Encyclopedia of Science Fiction. New York: St. Martinュs Griffin, 1993. SF やファンタジーなど大衆文学作家を調べる際に有用。サブカルチャー、科学理念に関する項目も多い。
(6) Flora, Joseph M., et al., eds. The Companion to Southern Literature: Themes, Genres, Places, People, Movements, and Motifs. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2002. 南部文学・文化研究に必携の書。
(7) Hart, James David. The Oxford Companion to American Literature. 6th ed. New York: OUP, 1995. 作家、作品、批評用語などを網羅した事典。巻末の年表も便利。
(8) Herzberg, Max, et al., eds. The Readers Encyclopedia of American Literature. Crowell, 1962. 写真・図版入り。中には論文なみの記事もある。
(9) Kort, Carol. A to Z of American Women Writers. New York: Facts on File, 1999. これまでの文学史ではなかなか扱われなかった 150 人のアメリカ女性作家について詳しく記述されている。
(10) McCaffery, Larry, ed. Postmodern Fiction: A Bio-Bibliographical Guide. New York: Greenwood, 1986. ポストモダニズム作家案内として便利なだけではなく、新しい文学の傾向をメタフィクション以後、フェミニズム以後、ヴェトナム戦争以後などの視点から、ポップカルチャーにも留意して解説した一冊。
(11) Merriam-Websterュs Encyclopedia of Literature. New York: Merriam-Webster, 1995. 英米文学だけではなく、西洋全般についての辞典。文学作品の登場人物の項目や、文学理論に関する項目もある。
(12) Preminger, Alex, ed. The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics. Princeton: Princeton UP, 1993. 詩と詩作に関する歴史・批評を網羅する辞典としては定番。
(13) 『アメリカ文学作家作品事典』本の友社、1991 年。
(14) J・チルダーズほか編『コロンビア大学 ― 現代文学文化批評用語事典』松柏社、1998 年。
(15) ローラ・ミラー編『サロン・ドット・コム ― 現代英語作家ガイド』柴田元幸監訳、研究社出版、2003 年。定評あるウェブ書評サイト（www.salon.com）を元にした現代作家ガイド。
(16) 五十嵐武士、油井大三郎編『アメリカ研究入門　第３版』東京大学出版会、2003 年。　アメリカ研究の基礎的手法を政治・経済・歴史・文化などの多角的な視座から解説する。解題つきの参考文献も有用。
(17) 小田隆裕・柏木博・巽孝之・能登路雅子・松尾弐之・吉見俊哉編『事典　現代のアメリカ』大修館書店、2004 年。2001 年の同時多発テロ事件以降の視点からアメリカの多様性を総合的に捉えた画期的百科。CD-ROM 付。
(18) 金関寿夫監修『アメリカを知る事典』平凡社、1986 年。歴史的事件、地名、人

名、社会的事象について解説。五十音でもアルファベットでも検索可能。
(19) 亀井俊介編『アメリカ文化事典』研究社出版、1999 年。
(20) 斎藤勇『英米文学辞典』第３版、研究社、1985 年。
(21) 坂本和男『イギリス・アメリカ演劇事典』新水社、1999 年。
(22) 田島俊雄ほか『アメリカ文学案内』朝日出版、1987 年。代表的な作家の作品リスト、内容解説など。ただし、女性作家、黒人作家など近年見直されている作家は収録されていない。巻末に作品解説リストが賦されている。
(23) 飛田茂雄編『現代英米情報辞典』研究社出版、2000 年。
(24) 福田陸太郎『アメリカ文学必携』中教出版、1975 年。
(25) 『Positive 01』書肆風の薔薇、1991 年。ポストモダン、アヴァンポップ作品のアンソロジーだが、巻末の「ポストモダン作家ベスト 60」は、英米の作家事典でも取り上げられていない作家たちの略歴・ビブリオグラフィが充実。

㈮. 書誌

(1) Scharnhorst, Gary, ed. American Literary Scholarship. Durham: Duke UP, 1995. 1965 年以来、年間の主要な著者論文を短評付きで紹介。各国におけるアメリカ文学の水準が年毎に見渡せる。
(2) A Critical Bibliography of American Literature Studies. London: Blackwell, 1998.
(3) MLA International Bibliography of Books and Articles on the Modern Languages and Literatures. New York: MLA. 必須の書誌。インターネット上や CD-ROM での検索も有効。
(4) Blanck, Jacob, ed. Bibliography of American Literature. New Haven: Yale UP, 1995-1991. 最大規模のアメリカ文学書誌。
(5) Harbert, Earl N., and Robert A. Rees, eds. Fifteen American Authors before 1900: Bibliographical Essays on Research and Criticism. Rev. ed. Madison: U of Wisconsin P, 1984. 1971 年に出版された書の改訂版。Henry Adams, Bryant, Cooper, Dickinson, Jonathan Edwards, Benjamin Franklin, Holmes, Howells, Washington Irving, Longfellow, Lowell, Norris, Edward Taylor, Whittier に関する書誌が充実。
(6) Kamp, Jim, ed. Reference Guide to American Literature. 3rd ed. Detroit: St. James, 1994.
(7) 大橋健三郎他編『総説アメリカ文学史：資料編』研究社、1979 年。
(8) 常松正雄他編『アメリカ文学研究資料編』南雲堂、1994 年。

㈯. 定期刊行物

(1) American Literary History (New York: OUP, 1989-). アメリカ文学・文化史など新歴史主義以降の批評をふまえた論文が多数掲載されている。

(2) American Literature (Durham: Duke UP, 1929-). 季刊の研究論文雑誌。号によっては特集号の場合もある。
(3) Early American Literature (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1965-). 植民地時代から 18 世紀頃までのアメリカ文学に関する論文を中心に掲載する学術誌。
(4) The New York Review of Books. 週刊書評紙。それぞれの本についてかなり詳しい書評を読むことができる。特集を組むこともある。
(5) The New York Times Book Review. 週刊書評紙。The New York Times 紙の日曜版についてくる。ネットでの閲覧可能。
(6) Nineteenth-Century Fiction (Berkeley: U of California P, 1945-). 19 世紀文学に関する論文を中心に掲載する学術誌。
(7) PMLA (New York: Modern Language Association, 1884-) MLA が出している機関誌。文学研究、文学教育などに関する論文のほかに、アメリカで開催される学会の情報なども掲載されている。
(8) Signs: Journal of Women in Culture and Society (Chicago: U of Chicago P, 1975-) 学際的に広くフェミニズム研究を扱う草分け的学術誌。
(9) 『アメリカ文学研究』年刊誌。日本アメリカ文学会の全国的機関誌。現在の日本におけるアメリカ文学研究の動向がわかる。国内外の研究書の書評も充実している。
(10) 『アメリカ研究』英文号と和文号をそれぞれ年一回ずつ発行。日本アメリカ学会の全国的機関誌。文学のみならず、アメリカ史、政治・経済の分野を網羅する。
(11) 『英文学研究』日本英文学会の全国的機関誌で、和文号と英文号が現在はそれぞれ年一回発行される。イギリス文学、アメリカ文学、英語学に関する論文を掲載。国内外の研究書の書評も充実している。年一回、日本英文学会新人賞が発表される。
(12) 『英語青年』月刊誌。日本国内の英米英語研究者の最新の論文を読むことができる。国内で開催される学会情報も充実。

㈷. 叢書

(1) American Authors and Critics Series. New York: Barnes & Noble. 各巻約 150 頁で、Cooper, Henry James, Hart Crane, Faulkner, Hawthorne, Hemingway, Steinbeck, Twain, Whittier, Tom Wolfe など主要作家に関する紹介と批評を各一冊にまとめる。
(2) Modern Critical Interpretations. New York: Chelsea. ハロルド・ブルームが監修する作家別の批評シリーズ。.
(3) Cambridge Companions to Literature. Cambridge: CUP. 英米文学における代表作の解説、批評をまとめてある。
(4) Twayne Masterwork Studies. New York: Twayne. 英米文学における代表作をその分野の第一人者が解説、批評。論文の書き方や研究方法の手本ともなる。

(5) Twayne ュs United States Authors Series. New York: Twayne. 各巻 150 頁ほどで作家別の概論書。巻末の解説つき書誌が便利。

(6) Norton Critical Editions. New York: Norton. 一次資料と主だった二次資料が一冊にまとまったお得なシリーズ。

(7) Literary Conversation Series. Jackson: UP of Mississippi. 作家のインタビューを集めたシリーズ。現代作家が中心となるが、資料的な価値が高い。

(8) American Writers Series. New York: American Book. アカデミックな個人選集で、詳細な解説と書誌がある。

(9) Twentieth Century Views. Englewood Cliffs: Prentice Hall. 作家別の評論集。

(10) The Critical Heritage Series. London: Routledge. 作家の同時代に発表された書評の集成で、Stephen Crane, Hawthorne, Melville, Twain, Whitman などの作品を扱う。同時代の作品への反応や、批評史が見て取れる。

(11) Recognition Series. Ann Arbor: U of Michigan P. 作家と同時代から現代に至る需要の歴史を示す論文集。

(12) Writers and Critics Series. London: Oliver & Boyd. 各巻 120 頁ほどの小冊子ながら、優れた概論を含む。

(13) 『アメリカ古典大衆小説コレクション』、松柏社、2003 年+。『オズの魔法使い』、『ぼろ着のディック』などのアメリカ大衆小説が豊富な解説とともに全 20 巻で刊行中。本邦初訳も多く含む。

□. ジャンル別通史

1. 詩

(1) Alexdander, Harriet Semmes, ed. American and British Poetry: A Guide to the Criticism, 1979-1990. Athens, OH: Swallow, 1995. 詩人と主要な作品ごとに項目が分かれ、主要な研究書、論文を紹介する。

(2) Bloom, Clive, and Brian Docherty, eds. American Poetry: The Modernist Ideal (Insights). Basingstoke: Macmillan, 1995. H.D., Pound, Harte Crane, W. C. Williams, Stevens, Rexroth, Moore, cummings, O ュHara, Olson, Ginsberg らに各々一章を充てる。

(3) Bontemps, Arna W., ed. American Negro Poetry. New York: Hill and Wang, 1996. 末尾に詩人の解説を付す。約 50 名の詩人を扱った 1963 年の初版から増補を続ける。

(4) Brunner, Edward. Cold War Poetry. Urbana: Illinois UP, 2001.

(5) Curry, Renee R. White Women Writing White: H.D., Elizabeth Bishop, Sylvia Plath, and Whiteness. Westport: Greenwood P, 2000.

(6) Golding, Alan. From Outlaw to Classic. Madison: U of Wisconsin P, 1995. 歴代の代表的なアンソロジーの変遷、文学論、市場の変化をたどり、アメリカ詩のキャノン編成を解説する。

(7) Haralson, Eric L., and John Hollander, eds. Encyclopedia of American Poetry: The Nineteenth Century. New York: Fitzroy Dearborn, 1998. The Library of America 版のアンソロジーAmerican Poetry: The Nineteenth Century（1993 年版）へのクロス・レファレンスを付し、約 150 名の詩人を取り上げ、各項目に書誌を備える。

(8) Hollander, John, ed. American Poetry: The Twentieth Century. New York: Library of America, 2000. 2 vols. テクストの註と作者についての解説を付す。

(9) Hollander, John, ed. American Poetry: The Nineteenth Century. New York: Library of America, 1993. 2 vols. Vol. 1 は Freneau から Whitman、Vol.2 は Melville から Stickney までを扱う。さらにネイティヴ・アメリカンの詩、民謡、黒人霊歌も納める。前掲書の 19 世紀版。

(10) Hoover, Paul, ed. Postmodern American Poetry. New York: Norton, 1994.

(11) Nelson, Cary, ed. Anthology of Modern American Poetry. Oxford: OUP, 2000. テクストの註と作者についての解説を付す。Whitman 以降 20 世紀末までの詩人の作品を扱う。類書に比べて Hughes の扱いが大きく、その他に強制収容体験を語る日系詩人の俳句、Native American の作品など幅広いジャンルをカヴァーする。長編詩も多い。

(12) North, Michael. The Dialect of Modernism: Race, Language, and Twentieth-Century Literature. New York: OUP, 1998. 白人モダニストの詩、文学にあらわれるアフリカン・アメリカンの声を論じる。モダニズム文学研究にも必読。

(13) Parini, Jay, and Brett C. Miller, eds. The Columbia History of American Poetry. New York: Columbia UP, 1993. The Columbia History of American Novel の姉妹版。アメリカ詩の定評ある文学史。

(14) Parini, Jay, ed. The Columbia Anthology of American Poetry. New York: Columbia UP, 1995. 植民地時代から現代までをカヴァーする最も包括的な部類のアンソロジー。

(15) Rader, Dean, et al., eds. Speak to Me Words: Essays on Contemporary American Indian Poetry. Tucson: U of Arizona P, 2003.

(16) Weinberger, Eliot, ed. American Poetry since 1950: Innovators and Outsiders. New York: Marsilio, 1993. Objectivists, ビート派、サンフランシスコ・ルネサンス、language poets などから 35 人を選んだアンソロジー。書誌付き。

(17) Wood, Marcus. The Poetry of Slavery: An Anglo-American Anthology, 1764-1865. New York: Oxford UP, 2003.

(18) D. W. ライト『アメリカ現代詩 101 人集』（坂崎順之助、森邦夫、江田孝臣訳）新装版、思潮社、2000 年。99 年刊の新装版。モダニズム以降の詩 207 編を収めたアンソロジー。

(19) 阿部公彦『モダンの近似値 ― スティーブンズ・大江･アヴァンギャルド』松柏

社、2001 年。英米のモダニズム詩人にとどまらず、大江他日本の作家が論じられる。
(20) 飯野友幸『アメリカの現代詩 ― 後衛詩学の系譜』彩流社、1994 年。
(21) 金関寿夫『アメリカ現代詩を読む』思潮社、1997 年。
(22) 木下卓ほか編『たのしく読める英米詩』ミネルヴァ書房、1996 年。
(23) 末川本皓嗣『アメリカの詩を読む』岩波書店、1998 年。五回の講義形式で、第一講ロマン派（Poe, Longfellow）、第二講 Whitman, Dickinson、第三講モダニズム（Pound, Frost）、第四講 Eliot, Stevens, cummings、第五講ポストモダニズムへ（Williams, Lowell）の構成。末尾に原詩と対訳を付す。
(24) 水崎野里子編・訳『現代アメリカ黒人女性詩集』土曜美術社、1999 年。1960-70 年代、女性解放運動および公民権運動を主題とする作品集。
(25) 富山英俊編『アメリカン・モダニズム ― パウンド・エリオット・ウィリアムズ・スティーヴンズ』（せりか書房、2002 年）。
(26) 渡辺信二『荒野からうた声が聞こえる ― アメリカ詩学の本質と変貌』朝文社、1994 年。全十章の評論集。Poe、Eliot、Ashbury の作品読解、Whitman、Pound、Ammons の文学観、Dickinson、Stevens における詩人像の構築を論じる。
(27) 渡辺信二訳『アメリカ名詩選 ― アメリカ先住民からホイットマンへ』本の友社、1997 年。ネイティヴ・アメリカン、植民地時代の詩人 Bradstreet や Tayler、18 から 19 世紀の Freneau, Bryant, Emerson, Poe, Thoreau, Whitman, Dickinson の作品を収める。末尾に原詩を付す。

2. 小説

(1) Bradbury, Malcolm. The Modern American Novel. Oxford: OUP, 1984. Henry James, Dreiser に始まり、Faulkner, Hemingway, ユダヤ系作家や黒人作家の台頭、Pynchon や Vonnegut らポストモダン作家までを網羅している。20 世紀文学を概観できる。邦訳・彩流社。
(2) Budick, Emily Miller. Nineteenth-Century American Romance. New York: Twayne, 1996. Twayne ュ s Studies in Literary Themes and Genres のうちの一冊。アメリカ文学において特権的な位置を与えられてきたロマンス論の概説書。巻末の bibliographic essay はそれだけでひとつのジャンル批評史になっており、啓発的な一冊。
(3) Chase, Richard. The American Novel and Its Tradition. New York: Doubleday, 1957. アメリカ小説の特質はロマンスにあると指摘する卓越した作品論。邦訳・北星堂。
(4) Davidson, Cathy N. Revolution and the Word. Extended ed. New York: OUP, 2004. アメリカ小説の曙を共和制時代に据えて、埋もれた作品群を掘り起こし詳細な分析を施した労作。1984 年の初版に大幅に加筆した増補版。
(5) Fiedler, Leslie A. Love and Death in the American Novel. Rev. ed. New York: Dell, 1966.

― . Waiting for the End. New York: Stein and Day, 1964.
― . The Return of the Vanishing American. New York: Stein and Day, 1968.
上記三冊は、アメリカ文学三部作と呼ばれるフィードラーの名著。アメリカ小説の根幹にある神話と原型を探るために、18 世紀から 200 年に渡るアメリカ小説を分析している。三冊とも邦訳・新潮社。
(6) Fisher, Philip, ed. The New American Studies. Berkeley: U of California P, 1991. 新歴史主義批評を踏まえたアメリカ小説批評のアンソロジー。アメリカ古典小説の読み直しや、女性文学、黒人表象など啓発的な論が揃っている。
(7) Hoffman, Daniel. Form and Fable in American Fiction. 1961. New York: Norton, 1973. Chase と同じく、アメリカ小説の特質を明らかにしようとする野心的な論考。邦訳・新潮社。
(8) Levy, Andrew. The Culture and Commerce of the American Short Story. New York: CUP, 1993. 何ゆえに短編小説がアメリカ独自のジャンルと見なされてきかを文学産業の視点から解明する画期的一冊。
(9) Marx, Leo. Machine in the Garden. New York: OUP, 1964. アメリカにおける自然と機械文明の対立を論じた古典的一冊。その後の多くの批評に影響を与えた書。邦訳・研究社。
(10) Rowe, John Carlos. Literary Culture and U. S. Imperialism: From the Revolution to World War II. Oxford: OUP, 2000. アメリカ帝国主義の萌芽を共和制小説までさかのぼって再検討する意欲作。特にネイティヴ・アメリカン文学への言及に最新批評の成果が看て取れる。
(11) Tompkins, Jane. Sensational Design. New York: OUP, 1985. 文学史には登場しなかった感傷小説や女性作家に着目した画期的な小説論。
(12) 伊藤詔子ほか編『新しい風景のアメリカ』南雲堂、2003 年。エコクリティシズムの観点からアメリカ小説を読み直す成果。
(13) 岩本巌『変容するアメリカン・フィクション』南雲堂、1989 年。
(14) 上岡伸雄『ヴァーチャル・フィクション』国書刊行会、1998 年。
(15) 海老根静江・竹村和子編『かくも多彩な女たちの軌跡 ― 英国圏文学の再読』南雲堂、2004 年。
(16) 大井浩二『センチメンタル・アメリカ』関西学院大学出版会、2000 年。センチメンタリズムを中心にしてアメリカ小説史およびアメリカの持つ共和制理念を読み直す試み。
(17) 小野清之『アメリカ鉄道物語 ― アメリカ文学再読の旅』研究社、1999 年。切り口の妙の好例。
(18) 木下卓、笹田直人、外岡尚美編『多文化主義で読む英米文学 ― あたらしいイ

ズムによる文学の理解』ミネルヴァ書房、1999 年。
(19) 柴田元幸『アメリカ文学のレッスン』講談社現代新書、2000 年。
(20) 高田賢一『アメリカ文学のなかの子どもたち ― 絵本から小説まで』(ミネルヴァ書房、2004 年)。
(21) 志村正雄『神秘主義とアメリカ文学』研究社出版、1998 年。
(22) 平石貴樹『小説における作者のふるまい ― フォークナー的方法の研究』松柏社、2003 年。21 世紀の文学を取り巻く厳しい状況の中で、小説に取り組むとはどういうことなのかを問う長大な序文は小説論としても有益。
(23) 八木敏雄編『アメリカ！』研究社、2001 年。日本のアメリカ文学界を代表する研究者の論考を収録。アメリカニズムの最先端。
(24) 若島正『乱視読者の英米短篇講義』研究社、2003 年。短編小説の読み説き方が具体的な作品分析とともに明解に論じられている。
なお、文学史のセクションでも上げた The Columbia History of American Novel も参照されたい。

3. 演劇
(1) Wilmeth, Don B., and Christopher Bigsby, eds. The Cambridge History of American Theatre. 3 vols. Cambridge: CUP, 1998+.
(2) Londre, Felicia Hardison, and Daniel J. Waterneier. The History of North American Theater. New York: Continuum, 1998. 前掲書とともに最新の通史。先住民による演劇的儀式からはじまり植民地時代を経て現代までの、正統な台詞劇、パフォーマンス、ショー、舞踊などを網羅する。
(3) Ackerman, Jr., Alan L. The Portable Theater: American Literature & the Nineteenth-Century Stage. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1999.
(4) Blum, Daniel. A Pictorial History of the American Theatre 1860-1985. 6th ed. New York: Crown, 1986. 6000 枚以上の写真を掲載。
(5) Chinoy, Helen Krich, and Linda Walsh Jenkins, eds. Women in American Theatre. Rev. ed. New York: Theatre Communications Group, 1987.
(6) Elam, Harry J., and David Krasner, eds. African-American Performance and Theatre History: A Critical Reader. New York: OUP, 2000.
(7) Frick, John W. Theatre, Culture and Temperance Reform in Nineteenth-century America. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
(8) Grimsted, David. Melodrama Unveiled: American Theatre & Culture 1800-1850. Berkeley: U of California P, 1968.
(9) Hill, Errol G. et al., eds. A History of African American Theatre. Cambridge UP, 2003.

アフリカ系アメリカ人（黒人）の視点から見たアメリカ演劇事典。
(10) McConachie, Bruce. American Theater in the Culture of the Cold War: Producing and Contesting Containment, 1947-1962. Iowa City: U of Iowa P, 2003.
― . Melodramatic Formations: American Theatre and Society, 1820-1870. Iowa City: U of Iowa P, 1992.　20 世紀演劇・映画で開花するアメリカ大衆文化のエッセンスである「メロドラマ」の根源を、文化研究のアプローチにより、19 世紀アメリカ演劇文化に探っている。
(11) Meserve, Walter J. An Outline History of American Drama. New York: Feedback Theatrebooks, 1994. 演劇の傾向と代表的な作品、参考文献を時代毎に簡潔にまとめた便利な入門書。
(12) Sternlicht, Sanford. A Reader ュs Guide to Modern American Drama. Syracuse: Syracuse University Press, 2002.
(13) Stevenson, Isabelle, and Roy A. Somlyo, eds. The Tony Award. Updated ed. New York: Heinemann, 2001. トニー賞の歴史と、ノミネートおよび受賞の全リストあり。
(14) 一ノ瀬和夫、外岡尚美編『たのしく読める英米演劇』ミネルヴァ書房、2001 年。
―『境界を越えるアメリカ演劇』ミネルヴァ書房、2001 年。
(15) 内野儀『メロドラマからパフォーマンスへ』東京大学出版会、2001 年。
(16) 長田光展『内と外の再生 ― ウィリアムズ、シェパード、ウィルソン、マメット 60 年代からのアメリカ演劇』鼎書房、2003 年。
(17) 坂本和男、来住正三編『イギリス・アメリカ演劇事典』新水社、1999 年。
(18) セオドア・シャンク『現代アメリカ演劇 ― オルタナティヴ・シアターの探求』（鴻英良ほか訳）勁草書房、1998 年。
(19) 田川弘雄ほか編『アメリカ演劇の世界』研究社、1991 年。19 世紀からシェパード、マメットまでをあつかう、邦語文献ではもっとも包括的な通史。
(20) 常山菜穂子『アメリカン・シェイクスピア ― 初期アメリカ演劇の文化史』国書刊行会、2003 年。シェイクスピアがいかにして新大陸アメリカの演劇伝統に移入されていったのかを、政治的・社会的・文化的側面から探る。

ロ. 時代別
1. 植民地時代〜18 世紀
(1) Vaughan, Alden, and Edward W. Clark. Puritans among the Indians. Cambridge, MA: Harvard UP, 1981. 捕囚体験記の一次資料を集めたアンソロジー。序章では、アメリカ文学における捕囚体験記の意義が論じられている。
(2) Bercovitch, Sacvan. The American Jeremiad. Madison: U of Wisconsin P, 1978. アメリカ文学における嘆きのレトリックがピューリタンからの伝統であることを示した一

冊。
― . The Puritan Origins of American Self. New Haven: Yale UP, 1975. アメリカ文学の中心的テーマとなっている自己意識の根源を探った一冊。前掲書とともに、ピューリタニズム研究における基本文献。
― . The Rites of Assent: Transformations in the Symbolic Construction of America. New York: Routledge, 1993.
(3) Miller, Perry. Errand into the Wilderness. Cambridge, MA: Harvard UP. ピューリタン研究の草分け的な研究書。翻訳・英宝社。
(4) Ferguson, Robert. The American Enlightenment. Cambridge, MA: Harvard UP, 1997. アメリカ独立革命前後における時代背景、文学作品をわかりやすくまとめた一冊。
(5) Slotkin, Richard. Regeneration through Violence. Hanover: Weslyan, 1973. アメリカ文学が生まれた場所として「荒野」の意義を説き、そこで発生する暴力に注目した一冊。
(6) Davidson, Cathy N., ed. Reading in America. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1989. 初期アメリカ文学に関する論文集。文化史的な背景を探る一冊。
(7) Armstrong, Nancy. Desire and Domestic Fiction. New York: OUP, 1987. 家庭小説、煽情小説をフェミニズム的視点で読み解いた一冊。
(8) 秋山健監修『アメリカの嘆き』松柏社、1999 年。アメリカ文学におけるピューリタニズムの伝統をさぐる論文集。
(9) 大西直樹『ニューイングランドの宗教と社会』彩流社、1997 年。
(10) 巽孝之『アメリカン・ソドム』研究社、2001 年。新歴史主義以降の批評理論を反映し、共和制時代のアメリカ文学研究と文化研究を融合させた啓発的な一冊。
(11) 八木敏雄『アメリカン・ゴシックの水脈』研究社、1992 年。
(12) 渡辺利雄『フランクリンとアメリカ文学』研究社、1980 年。

2. 19 世紀
(1) Barnes, Elizabeth. States of Sympathy: Seduction and Democracy in the American Novel. New York: Columbia UP, 1997.
(2) Barbour, James, and Tom Quirk, eds. Writing American Classics. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1990. 『フランクリン自伝』から『エデンの東』まで、アメリカ文学の古典と目されている作品を、作家の伝記、歴史的背景、文化的背景などと照らし合わせて分析した論文集。
(3) Brodhead, Richard H. Cultures of Letters: Scenes of Reading and Writing in Nineteenth-Century America. Chicago: U of Chicago P, 1993. Hawthorne のような男性作家や Louisa May Alcott や Sarah Orne Jewett などの女性作家を論じながら、十九世紀アメリカの読書・創作空間を包括的に炙り出す。

(4) Buell, Lawrence. New England Literary Culture. Cambridge: CUP, 1986. アメリカ独立革命から超絶主義へむかうニューイングランドの文化・文学についての論考。
(5) Douglass, Ann. Feminization of American Culture. New York: Knopf, 1977. 19 世紀に周縁に追いやられていく白人中産階級の女性の立場と、大衆文化の女性化を論じた一冊。
(6) Feidelson, Charles, Jr. Symbolism and American Literature. Chicago: U of Chicago P, 1953. 19 世紀文学の基本的文献。邦訳・旺史社。
(7) Gilmore, Michael. American Romanticism and the Market Place. Chicago: U of Chicago P, 1985. 翻訳・松柏社。市場主義の出現に伴う文学の商品化と、アメリカ・ロマン派文学の独自性との関係を問う。
(8) Goddu, Teresa. Gothic America: Narrative, History, and Nation. New York: Columbia UP, 1997. 社会的、政治的、文化的関わりからアメリカン・ゴシックを読み解く。
(9) Gura, Philip F. The Crossroads of American History and Literature. University Park, PA: Pennsylvania State UP, 1996. 思想家ソローから宗教家、果ては楽器職人などを分析対象としつつ、歴史、文化、文学の交叉する地点を掘り起こした優れた文化研究の著。
(10) Halttunen, Keren. Murder Most Foul: The Killer and American Gothic Imagination. Cambridge: CUP, 1998. 暴力描写、殺人事件がどのようにアメリカ文学における、ゴシックの想像力を発達させていったのかを探る。
(11) Lewis, R. W. B. The American Adam. Chicago: Chicago UP, 1959. アメリカ小説の主人公たちに見られる無垢を機軸にしてアメリカ小説の伝統をさぐる。邦訳・研究社。
(12) Matthiessen, F. O. American Renaissance. New York: OUP, 1941. アメリカ 19 世紀文学の基本的文献。
(13) Michaels, Walter Benn. The Golden Standard and the Logic of Naturalism. Berkeley: U of California P, 1987. 新歴史主義批評による自然主義文学の読み直しの成果。市場経済、消費文化と文学の関わりを追う。
(14) Nelson, Dana D. The Word in Black and White: Constructing Race in American Literature, 1628-1867. New York: OUP, 1992.「文学」という文化的装置を通していかに「人種」が表象、構成されていくかを明晰に論じた名著。
(15) Reynolds, David. Beneath the American Renaissance. Cambridge, MA: Harvard UP, 1988. 文化史的な視点を取り入れ、代表的な男性作家以外に、19 世紀女性作家を意欲的に論じた浩瀚な一冊。
(16) 巽孝之『ニュー･アメリカニズム』青土社、1995 年。歴史や文学をアメリカン・ナラティヴの伝統に基づき分析した米文学思想史。
(17) 大串尚代『ハイブリッド・ロマンス ― アメリカ文学にみる捕囚と混淆の伝統』松柏社、2002 年。「ハイブリッド・ロマンス」をキーワードに、植民地時代から現代へと連なる文学史をわかりやすく解説。

(18) スコット・スロヴィック・野田研一編著『アメリカ文学の〈自然〉を読む ― ネイチャーライティングの世界へ』ミネルヴァ書房、1996 年。文学研究の一つの潮流を形成したネイチャーライティング、エコクリティシズムの分野における成果。
(19) 藤井健三『アメリカ英語とアイリシズム ― 19-20 世紀アメリカ文学の英語』中央大学出版会、2004 年。19 世紀アメリカ文化にアイルランド系移民の文化がいかに浸透していたのかを、英語史の観点から丹念にたどり、文化史を転倒させる画期的な書。
(20) 渡辺利雄編『読み直すアメリカ文学』研究社、1996 年。

3. 20 世紀
(1) Currie, Mark, ed. Metafiction. New York: Longman, 1995. 代表的批評家によるメタフィクション論。必読のアンソロジー。
(2) Caruth, Cathy, ed. Trauma: Explorations in Memory. Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1995. 「ヒロシマ」「アウシュビッツ」「エイズ」などにまつわるトラウマ的記憶を精神分析学的に探求する論集。邦訳・作品社。
(3) Douglass, Ann. Terrible Honesty: Mongrel Manhattan in the 1920s. New York: Noonday, 1996. アメリカ・モダニストへのフロイトの影響力を、膨大な文化的資料を駆使して読み解く「フェミニスト都市心性史」。
(4) Lackey, Kris. Road Frames: The American Highway Narrative. Lincoln: U of Nebraska P, 1997. 「ロード・ナラティヴ」として旅・移動の観点からアメリカ文化史を読み返す成果。
(5) McHale, Brian. Postmodernist Fiction. London: Routledge, 1987. ポストモダン小説の技法を丁寧に解説した入門書。
(6) Michaels, Walter Benn. The Gold Standard and the Logic of Naturalism. Berkeley: U of California P, 1987. 自然主義文学とアメリカ経済史を結びつけて論じた新歴史主義批評の成果を表す一冊。
― . Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism. Durham: Duke UP, 1995. 文化アイデンティティが人種に根ざすことを明らかにし、モダニズム文学に新しい光を投げかける意欲作。
(7) Seltzer, Mark. Bodies and Machines. New York: Routledge, 1992. 自然主義文学をテクノロジーと身体の関係性から論じた一冊。
(8) Takaki, Ronald. A Different Mirror: A History of Multicultural America. Boston: Little, 1993. アメリカにおけるマイノリティの歴史を丹念にたどった多文化主義以降の新しい歴史書。邦訳・明石書店。
(9) Tanner, Tony. City of Words. London: Jonathan Cape, 1971. メタフィクションを含む

アメリカ現代小説を同時代的な視点から論じる。邦訳・白水社。
(10) Wald, Gayle. Crossing the Line: Racial Passing in Twentieth-Century U.S. Literature and Culture. Durham: Duke UP, 2000.
(11) 生井英考『負けた戦争の記憶 ― 歴史の中のヴェトナム戦争』三省堂、2000 年。
(12) 折島正司『機械の停止 ― アメリカ自然主義小説の運動/時間/知覚』松柏社、2000 年。
(13) 宮本陽一郎『モダンの黄昏 ― 帝国主義の解体とポストモダニズムの生成』研究社、2002 年。文化的・歴史的資料を鋭く読み解き、1930 年代やモダニズムの文学を再検討する大作。

□. 文化と文学
1. エスニシティとジェンダー
(1) Ashcroft, Bill, et al., eds. The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-Colonial Literature. New York: Routledge, 1989. ポスト・コロニアル批評実践の代表的一冊。邦訳・青土社。
(2) Baker, Houston A., Jr., ed. Three American Literatures: Essays in Chicano, Native-American, and Asian-American Literature for Teachers of American Literature. New York: MLA, 1982. エスニック文学の批評史を概観するのに最適。
(3) Baym, Nina. Womenュs Novels: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-1870. 2nd ed. Ithaca, New York: Cornell UP, 1993. 19 世紀女性文学についての基本書。
(4) Benshoff, Harry F., et al. America on Film: Representing Race, Class, Gender, and Sexuality at the Movies. Blackwell, 2003. アメリカ映画を素材に、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティの観点からアメリカ文化を探る。
(5) Carby, Hazel V. Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist. New York: OUP, 1987. 人種とジェンダーの交錯を明解に論じた好著。
(6) Fetterley, Judith. The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction. Bloomington: Indiana UP, 1978. 翻訳・ユニテ。
(7) Kilcup, Karen L. Soft Canons: American Women Writers and Masculine Tradition. U of Iowa P, 1994. アメリカ女性作家の作品の中にいかに男性中心の文学史的正典が反映され、かつしたたかに転倒されているかをたどる。
(8) Kim, Elaine H. Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context. Philadelphia: Temple UP, 1982.アジア系アメリカ人女性文学の先駆的かつ代表的批評書。翻訳・世界思想社。
(9) Krupat, Arnold. The Voice in the Margin: Native American Literature and the Canon.

Berkeley: U of California P, 1989.
(10) Christian, Barbara. Black Feminist Criticism: Perspectives on Black Women Writers. New York: Pergamon, 1985. 黒人女性文学批評の先駆的かつ代表的一冊。
(11) Gates, Henry Louis, Jr. The Signifying Monkey: A Theory of African American Literary Criticism. New York: OUP, 1988. 黒人文学批評理論の必読書。
(12) Schowalter, Elaine. Sister ュ s Choice: Tradition and Change in American Women ュ s Writings. New York: Oxford UP, 1996.
(13) Sollors, Werner. Neither Black Nor White Yet Both: Thematic Explorations of Interracial Literature. Cambridge: Harvard UP, 1997. 異人種混交の言説を丁寧に考察した一冊。巻末の年表が充実。
(14) 加藤恒彦、北島義信、山本伸　編著『世界の黒人文学 ― アフリカ・カリブ・アメリカ』鷹書房弓プレス、2000 年。
(15) 植木照代、ゲイル・K・佐藤他『日系アメリカ文学 ― 三世代の奇跡を読む』創元社、1997 年。日系アメリカ文学の多様性を提示する。
(16) 木下卓、笹田直人、外岡尚美編『多文化主義で読む英米文学 ― あたらしいイズムによる文学の理解』ミネルヴァ書房、1999 年。
(17) アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学 ― 記憶と創造』大阪教育図書、2001 年。
(18) 黒人研究の会編『黒人研究の世界』青磁書房、2004 年。アメリカ、アフリカ、カリブ地域の文学、歴史、社会、文化を網羅する。
(19) リロイ・ジョーンズ『ブルース・ピープル』（飯野友幸訳）音楽之友社、1999 年。ブルースをアフロ・アメリカン文化の根幹に据え、その発展を論じる。カウンター・カルチャーの研究にも当時の雰囲気を伝える貴重な書。

2. 思想史・文化史

(1) Anderson, Lorraine. Literature and the Environment: A Reader on Nature and Culture. New York: Longman, 1999.
(2) Bloom, Allan. The Closing of the American Mind. New York: Simon, 1987. 邦訳・みすず書房。
(3) Davidson, Cathy N., ed. Reading in America. Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1989. これまでの文学史が著者の歴史であったとしたら、読者の歴史はどのように探るべきか。このような問題意識に基づく第一人者たちによる好論文集。
(4) Fox, Richard Wightman, and James T. Kloppenberg, eds. A Companion to American Thought. Oxford: Blackwell, 1995. 「市民権」、「フェミニズム」から「野球」に至るアメリカ思想に関する 650 以上の見出し語を、著名な研究者を含む 300 人以上の執筆者

が解説。
(5) Hirsch, E. D., Jr. Cultural Literacy: What Every American Needs to Know? New York: Houghton, 1987. 前掲 Bloom と並ぶ本書は、アメリカ新保守主義の論客がアメリカ文化における共通言語の可能性を探求してベストセラーになった対抗文化批判の書。邦訳・TBS ブリタニカ。
(6) Hofstadter, Richard. Anti-Intellectualism in American Life. 1962. New York: Vintage, 1963. 膨大な資料を駆使して、アメリカ文化のなかに反知性主義という潮流を読み取る。邦訳・みすず書房。
(7) Hollinger, David A., and Charles Capper, eds. The American Intellectual Tradition. 4th ed. 2 vols. New York: OUP, 2001.
(8) James, C. L. R. American Civilization. London: Blackwell, 1993. エリス島に拘留された経験を持つトリニダード出身の著者による移民の視点から論じたアメリカ文明論。
(9) Kaplan, Amy, and Donald E. Pease, eds. Cultures of United States Imperialism, Durham: Duke UP, 1993. 帝国主義をアメリカ的文脈において捉え直そうと試みたニューアメリカニズム批評の収穫。17 世紀の初期移民から現代のポップ・カルチャーにいたるまで、広範なテーマを気鋭の批評家が論じる。
(10) Kerber, Linda K., and Jane Sherron De Hart, eds. Women ュ s America: Refocusing the Past. New York: OUP, 1982. アメリカ女性史研究に必須の基本的資料・論文を収録。『ウィメンズ・アメリカ　資料編・論文編』の全二冊。邦訳・ドメス出版。
(11) Livingston, James. Pragmatism and the Political Economy of Cultural Revolution, 1850-1940. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1994. 法人資本主義の勃興が近代主体の形成と不可分であるという視点から、プラグマティズム哲学と自然主義文学を論じる。
(12) Nadel, Alan. Containment Culture: American Narratives, Postmodernism, and the Atomic Age. Durham, NC: Duke UP, 1995. アメリカにおけるポストモダン思想を冷戦期の政治文化と絡めて論じた好著。
(13) Mukerji, Chandra, et al., eds. Rethinking Popular Culture. Berkeley: U of California P, 1991. アメリカ文学とアメリカ大衆文化の関係は切り離せない。いわゆるポップ・カルチャーの視点を研究へ導入するための絶好の手引き。
(14) Pease, Donald, et al., eds. The Futures of American Studies. Durham, NC: Duke UP, 2002. アメリカン・スタディーズの新しい地平を展望する。
(15) Smith, Henry Nash. Virgin Land: The American West as Symbol and Myth. Cambridge, MA: Harvard UP, 1971. アメリカ文学における西部の意味を解明した古典的研究。邦訳・研究社。
(16) Susman, Warren I. Culture as History: The Transformation of American Society in the Twentieth Century. New York: Pantheon, 1984. 20 世紀アメリカ史を、都市論など文化的

表象を通じて包括的に論じた書。
(17) ディック・バウンテンほか『クール・ルールズ ― クールの文化史』研究社、2002 年。
(18) 奥出直人『トランスナショナル・アメリカ ― 「豊かさ」の文化史』岩波書店、1991 年。
― .『アメリカン・ポップ・エステティックス ― 「スマートさ」の文化史』青土社、2002 年。
(19) 亀井俊介『アメリカン・ヒーローの系譜』研究社出版、1993 年。
― .『アメリカ文化と日本 ― 「拝米」と「排米」を超えて』岩波書店、2000 年。
(20) 笹田直人ほか編『概説アメリカ文化史』ミネルヴァ書房、2002 年。
(21) 鈴木透『実験国家アメリカの履歴書 ― 社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』慶應義塾大学出版会、2004 年。入門書として最適。
(22) 瀧田佳子『アメリカン・ライフへのまなざし ― 自然・女性・大衆文化』東京大学出版会、2000 年。
(23) 巽孝之『リンカーンの世紀』青土社、2002 年。
(24) 津田幸男ほか編『アメリカナイゼーション ― 静かに進行するアメリカの文化支配』松柏社、2004 年。
(25) 野田研一『交感と表象 ― ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003 年。ネイチャー・ライティング、エコクリティシズムの最新の成果。
(26) 野田研一ほか編『越境するトポス ― 環境文学論序説』彩流社、2004 年。
(27) 早瀬博範編『アメリカ文学と絵画 ― 文学におけるピクトリアニズム』溪水社、2002 年。
(28) 本間長世、亀井俊介編『アメリカの大衆文化』研究社、1975 年。
(29) 能登路雅子『ディズニーランドという聖地』岩波新書、1990 年。優れたテーマパーク論であると同時に、ディズニーランドという装置にアメリカの縮図をみた画期的論考。
(30) 渡辺靖『アフター・アメリカ ― ポストニアンの奇跡と〈文化の政治学〉』慶應義塾大学出版会、2004 年。

□. 文学批評案内

(1) Selden, Raman. Contemporary Literary Theory. 2nd ed. Lexington: UP of Kentucky, 1989. 文学批評理論入門としては最適の書。ロシア・フォルマリズムからフェミニズムまで、ひととおりの基本概念をしることができる。各セクションに、further reading のリストがついている。邦訳・彩流社。
(2) ― . Practicing Theory and Reading Literature: An Introduction. New York: Harvester, 1989. 批評理論をどのように実践で使うかを示した書。
(3) Belsey, Catharine. Critical Practice. London: Routledge, 1980.
(4) Culler, Jonathan. Literary Theory: A Very Short Introduction. Oxford: OUP, 1997.簡便で手軽な大きさながらも、批評において何を問題にすべきかをわかりやすく説いた一冊。翻訳・岩波書店。
(5) Davis, Robert Con, and Ronald Schleifer, eds. Contemporary Literary Criticism. 4th ed. New York: Longman, 1998. T. S. Eliot から Donna Haraway までを含む批評論文集。各セクションにつけられた解説および参考文献が有用。
(6) Lawrence, D. H. Studies in Classic American Literature. 1923. London: Penguin, 1971. 邦訳・講談社文芸文庫。
(7) Leitch, Vincent. American Literary Criticism from the Thirties to the Eighties. Columbia UP, 1989. 翻訳・彩流社。アメリカ文学批評史を包括的にまとめている。
(8) Lentricchia, Frank, and Thomas McLaughlin. Critical Terms for Literary Study. Chicago: U of Chicago P, 1990. 『現代批評理論 22 の概念』平凡社、1994 年。批評用語集であるが、ひとつの用語の背後にある理論的な枠組みを、丹念に説明する論文集と言う色合いが濃い。第二版では、さらに六つの批評用語が加えられ、それを補った邦訳『続：現代批評理論 6 の概念』（平凡社、2001 年）もある。
(9) Morrison, Toni. Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination. New York: Vintage, 1992. アフリカ系アメリカ人の存在をアメリカ文学・文化の中心に置き、従来の文学史を書き替えた記念碑的作品。邦訳・朝日選書。
(10) Reising, Russell. The Unusable Past. New York: Methuen, 1986. アメリカにおける 20 世紀の文学理論を歴史的に追った批評史。新批評からポスト構造主義あたりまでを網羅する。邦訳・松柏社。
(11) Routledge Critical Thinkers Series. 一冊につき一人の思想家・批評家を解説。de Man, Fredric Jameson, Baudrillard, Freud, Said, Judith Bulter などが刊行されている。今後も続刊予定。
(12) Routledge New Critical Idiom Series.「モダニズム」「インターテクスチュアリティ」「セクシュアリティ」「ロマンティシズム」「ナラティヴ」など文学批評用語を一冊ごとに解説するシリーズ。
(13) Key Contemporary Thinkers Series. Stanford UP から出ている思想家・批評家解説シリーズ。Said, Certeau, Chomsky, Goffman, Eco など西洋思想に影響のある人物を一冊ごとに解説するシリーズ。
(14) Oxford Very Short Introduction Series. 批評理論のツールとして有用な概念を各テーマ一冊で簡潔にまとめたシリーズ。そのテーマは人文科学に限らず、社会科学や自然科学におよぶ。前掲 Culler もシリーズ中の一冊。

(15) Routledge Thinking in Action Series. 「コスモポリタニズム」「文学」「作者性」 などについて、Derrida や Zizek といった第一線の学者が哲学的な考察を加えるもの。コンパクトながら一次文献としての価値も高い。
(16) R・スコールズ『テクストの読み方と教え方 ― ヘミングウェイ・SF・現代思想』折島正司訳、岩波書店、1987 年。ヘミングウェイのテクストを用い、精読の過程の一例を具体的に示す箇所が参考になる。
(17) 岡本靖正他編『現代の批評理論』シリーズ（全三巻）研究社。
(18) 巽孝之『メタファーはなぜ殺される　現在批評講義』松柏社、2000 年。
(19) 丹治愛編『批評理論』講談社、2003 年。
(20) 富山太佳夫編『現代批評のプラクティス』シリーズ（全五巻）研究社。以上の４点は、批評理論の入門書として適している。
(21) 姜尚中ほか編集協力『思考のフロンティア』シリーズ岩波書店、1999 年+。「フェミニズム」「カルチュラル・スタディーズ」など現代社会の重要なキーワードを元に新たな思考の可能性を展望する入門シリーズ。
（巽孝之・大串尚代・深瀬有希子・中垣恒太郎・永野文香・辻秀雄編）